



ドクエチな彼女の 育てかた

基本27枚 本編132枚

マニア向けおまけ差分32枚 全164枚

恵

「えっと……そっか……男の人ってそんなに女の子のカラダに興味あったんだねえ。
実際そんなにきれいなものでもないよ？ あんまり期待するとがっかりするよ？
…………え？ むしろそのほうがいいって……うーん……それもなんだかなー。
私、思春期の男子の性欲をちょっと甘く見すぎてたよ。はあ……心配だなあ……」

ビ ッ 子
ドブエ子な彼女の
育てかた

制作 みちのく一人旅

プロフィール



安芸 倫也 (あき ともや)

豊ヶ崎学園2年B組。筋金入りのオタクで校内でも指折りの有名人になるほどである。同人サークルBlessing softwareの代表でプロデューサーを勤める。自分の集めた最高のメンバーで、理想とするギャルゲーを作るのが夢でそのために並々ならぬ努力と情熱を捧げている。



おおつ 加藤
やつときてくれたか
随分遅かったけど
何かあったのか？

そっか なら仕方ないな
それより早く俺の部屋へ
靴の向き揃えるのとか
どうでもいからっ

お邪魔しまーす
うん 遅くなってゴメンね
ちよつと日直の仕事
頼まれちゃって

えー そんなに急ぎの用事なら
学校でいってくれれば
よかったのに

いや 学校だと少し……というか
だいぶ都合の悪い話なんだ



ふーん そっかー
そういえば安芸くんのお家
二回目だねー
相変わらずすごい部屋だねー
またアニメグッズ増えてるね

で ここできできない
大事な用ってなにかな？

それなんだが なあ加藤
いきなりで申し訳ないんだが
メインヒロインの
女性器を見せてくれないか？
どうしてもこれが解決しないことには
ゲーム作りが進まないんだよっ！

プロフィール



加藤 恵 (かとう めぐみ)

豊ヶ崎学園2年B組 身長：160cm

スリーサイズ：B 84/W 57/H 83

Blessing softwareのメインヒロイン担当。

容姿は整っているが、印象が薄く、クラスでも目立たないキャラ。オタクの世界とは縁がなく、暇があればスマホをいじり、服や買い物が好きな普通の女子だが、安芸やサークルメンバーと関わることでオタク知識を高めていき、しだいに、ゲーム作りへのやる気を垣間見せるようになる。



ねえ 安芸くん……
それっていわゆる
セクハラって
やつじゃないのかな？

いやそこは加藤
こだわりって欲しい
確かに現実の女の子を知らないほうが
妄想がはかどって よい作品が
生まれるという例は多々ある

けど俺が作りたいのは
もつとこう……ほらなんていうか
リアルなんだよ 二次元ではあるけど
ファンタジーの女の子が
作りたいわけじゃないんだ

いつか現実で本当にこんな子に
出会えるかもしれない
という希望がもてるようなさ

その気持ちはわからなくも
ないけど……でも作りたいのって
ギャルゲーだよな？

前に安芸くんの家で
プレイさせてもらった時は
ヒロインは水着とか

わかってないな加藤！
ギャルゲーとエロゲは
もはや紙一重なんだよっ！
実際エロゲ派生のゲームが
家庭用ゲーム機では全年齢向けに
なつて大ヒット&アニメ化
なんてのはよくあるパターンだ

——百歩譲ったとしても
パンツとか見せることはあつても……
……その……女性の性器そのものを
どうこうつていうのは
ちよつと違うといふかなんといふか……
それエロゲじゃね？ みたいなの……

つまり大切なのは年齢制限じゃない
キャラにこめられた奥行き
深み 魂 そういつたものなんだ
洋服をうまく描くには
人体の構造を知っていなきやダメだし
パンツにしてもそうだ

おまんこというものの形
存在そのものを理解してないと
パンツの描写に気持ちが
入らないんだよっ！
そこで物語が破綻してしまうんだ

モジ…

モジ…



ええっ……
そんな大げさだなあ……

うーん……
そんなに見たければ
ほら今はインターネット
とかもあるし……

なあ頼むよ加藤！
協力してくれっ！

一生のお願いだ
サークルの運命
がかかっているんだ

キッ……

それにおまんこは
人によって形も匂いも違うし
柔らかさも 毛の量も
すべてが違うだろう
俺は加藤の……ヒロインおまんこを
じっくりなめつくすように
観察してみたいんだっ！

そんなものは男だったら
毎日のように見ているさ
でも そんな薄っぺらい
視覚的情報が欲しいんじゃない
五感で体験したいんだ
この目で この手で
この鼻でっ！ わかるだろ？

そんなにはつきりいわれると
恥ずかしいのと怒りと呆れるのを
通り越して感心するよね すごいよね逆に
さすがは安芸くんだよ

やだ カッコイイ……

無理を承知でこの通りっ！
お願いしますっ 加藤様っ！
お礼に俺に出来ることなら
なんでもするからっ！

あ
ずり

ちよつと……安芸くん
土下座しないでよお……
これじゃなんか私が一方的に
悪いみたいじゃない
しかも無料素材シルエツト
で手抜きして
ぜんぜん心もこもってないし……

ほら いい加減立とうよ
安芸くん
今なら冗談でしたので
全部許してあげるから
ね？

コロ……

コロ……

いいやつ！ 加藤が
ウンといつてくれるまで
俺はここを動かないっ！
どうか俺を男にしてくれっ！

ええっ 動かないっていわれても
ここ安芸くんの部屋だし効果なしだよ
……はあ でも困ったなあ……
安芸くんって
へんなどころで頑固だからなあ……
こうなっちゃうと
もうお手上げなんだよね……

おれがニ
おれがニ

うーん……まあ形はどうあれ
彼氏のいる世の中の女の子は
似たようなお願いをされて
いるんだとは思っただけだね……

それに例えば美大の
ヌードモデルさんは
実際そういう人のための
職業なわけだし

だからこうして
頼んでるんじゃないか！
彼女ができるのを待つてたら
10年たっても
完成する気がしないっ！

そう考えると
そう変なことでも
ないような気が
しないでもないけど

でもやっぱりそういうのは
彼女を作って頼んだほうが
……っっていても
安芸くんには無理だよ

……はあ
……仕方ないなあ
じゃあ乗りかかった
船ってことで……

あつ いったくけどシャワー
浴びてないから絶対汚いよ？
幻滅してもらえないよ？

——けど安芸くん
絶対に誰にも
言わないって約束できる？
……特に澤村さんとか
露ヶ丘センパイとか

もちろんだともっ！
本当にいいのか加藤？

いや いいんだよ
むしろそのほうが参考になるよ
俺が知りたいのは
きれいごとじゃない
生の女の子の生体だからな

わかった……
じゃあまず
どうすればいいのか？



「まずはパンツを觀察せよな。」

スカートをめくりあげてくれないか？」

「あゝ。……これどうして。」

「いいぞ。そのままじつじつ。」

——おおっ薄いブルーか。まあアリといえばアリだな。

「ロインのパンツは白でないといけないというのは、おそら1920世紀の価値観だよな。」

とはいえ、あまりに派手すぎるニューザーが引くのも事実。

ゆえに、薄いピンクカブルーあたりのシンプルなデザインが、リアリティとしては最もオススメ。」



「まあ今時、女子〇生になってまだ。」

白いパンツなんか履いてる子は少ないからねえ。子供っぽいから。」

「なるほど。男子が白ブリーフを卒業するようなものか。」

それじゃ加藤は1枚も白いパンツをもってなかったりするの？」

「あゝ。タンスを探せば、まだ2、3枚は残ってるんじゃないかなあ？」

別に白が嫌いってワケじゃないんだけどね。綿パンじゃなくて

デザインがよければぜんぜんありだと思うし。

ただ、白だと汚れやすいし、どうせ買うなら色つきのほうが

かわいくてお得な感じがするっていうか、すすんで選はないっただけで

たぶん一時期だけ白パン卒業期間ってのが女子にはあるんだと思うよ。

もう少し大人になったら、また履きたす人もいると思うし、男の子ウケもいいしね。」

「そっか。やっぱり王道は王道で残すべきだな。」

白パンツシーンは入れることにしよう。ちなみにこの下着の購入場所と値段は？」

「えっと……確か駅前のモールの下着屋さんで、」

セールで3枚2000円のコーナーにあったやつかなあ」

「へえ。けっこう安いとだな」

「いろいろあるけどねえ。」

でも下着は高くても2千円くらいのはか買う気になれないかな。

ブラジャーとセット売りで、気に入ったのなら、3千円までならうってかんじかも」

とわ

ドキ

ぽん

ちー

まぢ

とわ

ドキ

ぽん

ちー

「だよなあー。俺もトランクスは3枚で千円のだ。100均ですますよとせめめる」

「その分服が欲しいよね」

「いや、浮いた金でマンガやゲームを買うんだっ！」

「ああ、そうだった……安芸くんはそっぴう人だったね。」

それはそっぴう、いしまでこのままであいたらいいのかな？ 足元がスースーするんだけど」

「ああ、待たせてすまない加藤。それじゃ次はニオイチェックに移行する」

「それだと、ごっちゃんが誘ってるみたいないかただよなえ」

「まあ、細かいことは置いておいて、もう少し足を開いてくれ」



「ん……ごうかな。はあ……やっぱり恥ずかしいな」

「それはお互い様だぞ。頼む側もけっこう恥ずかしいんだ」

「あーそうかもね。ごうちは基本受身だから従っただけで、
口に出して指示するほうが、案外もつと勇気がいったりするのかもね」



「じゃあ……顔近づけるぞっ」

「ん……お手柔らかな」

「わあ……近いなあ。」

ふとももに息がかかってくすぐりたい」

「スーハー。匂いは、軽いおしっこ臭かな？」

少し湿っことで、ちよつとツンとするけど、ぜんぜん嫌な刺激じゃない。

むしろ、フルーティーな甘さをを感じるような不思議と落ち着く香りだ。

……なるほど、放課後女子〇生のスカートの下はこんな匂いが閉じ込められているのか。

ずつと嗅いでいたいほど、いい匂いだぞ加藤。ちなみに、このパンツは何時間くらいはらんだの？」

「えっと……昨日の夜8時にお風呂で換えてからだから……」

今は夕方の5時で……21時間くらいかなあ？」

まあ、一日近くはいらたろうし、しかも湿っちやうやいな。

おしっこきれいに拭き取ったつもりでも、構造的にあとから垂れこえる……」



「そっか、男でも残尿が染み込んで大変だし、
女子ならもっと大変だろうな。他にもいろいろな液体が出そっか」

「そっかだよ。いろいろ気を使っただよ。女の子は」

「ぶはあー。このままずっと嗅いでたいけど、
そうもいつてられないからな。先に進むぞ加藤
スカートはそのままで、ひとまず下着だけ脱いでもらえるか？」

「はあ……やっぱり恥ずかしいなあ……待ってね……んじむじむ……」

「ん？ ちょっと待った加藤！

ストップ！ そのままじゅんじゅん」

「ええっ？」



「おおっ。いいぞ加藤。この脱ぎかけの態勢が実にいい。

仮にヒロインが美少女フィギュア化された場合、この具が見えそうで見えない
腰とお尻を中心に丸みを帯びたラインが、ユーザーの購入意欲をそそるんだよ。

思い切りエロ寄りじゃないけど、どうせ買うなら抱き枕カバーのように、
アタルト向けの要素も欲しい。そんな潜在欲求をくすぐるたまらないポージングだ」

「そ……そうなんだ。原型師はそんなことまで考えて作るんだねえ」

「あたりまえじゃないか。出すだけで、黙ってても売れるような人気作なら

ともかく、美少女が売りの作品なんかは、商品展開も大事な収入源だし、

フィギュアに投資できるユーザーというのは、

基本的に小金持ちの太客なんだ。それに情報発信力も抜群だ。

今度の展望を考えれば、彼らの支持を得られるのは何より大きい要素なんだ」

「へえ。さすがプロデューサーだねえ。そういうのもちゃんと調べられるんだねえ」

「だてにオタク歴が長いわけじゃないからな」

「でも、思っただけと……それだけだよ」

「美少女フィギュアはみんなこのポーズになっちゃうやわらない？
安井くんの部屋にあるのも、あのポーズだよ……」

「ひー」

「お尻」

「お尻」

「お尻」

「ああ、確かにそれは頭の痛い問題だが、他にもファンが喜ぶポーズというのは例えば、キャラの売り、おっぱいなのかお尻なのか、ワキなのか足なのかによって何種類もあるし、服装によってまかせたりするから、同じのをよほど立て続けに出さない限りは、様式美として許してくれるだろう」

「えっと……じゃあ私の場合、魅力はお尻ってこと？」

「っていうか、よく考えたら、これお尻の穴は見えちゃってるよね？」

「大丈夫だ。お尻の穴は、ビデオでも同人誌でもモザイクなしで通用する、いわば抜け道というか、抜け穴なんだ。

ワイセツではないという上の判断だから、異物を挿入しない限りは見せてもセーフになるんだ」

「へえ。なんかとんごん無駄な知識が増えていくなあ」

「ちなみに、加藤の魅力はお尻というよりも万能型だろうな。

このポーズはそのキャラがやっても様になる。加藤のような

キャラが死んでる子でも無難に魅力を引き出してくれる実に便利なポーズなんだ」

「むー。それなんか軽くティスられてる気がするなあ」

「いや、ヒロインっていうのはそれでいいんだよ。

特徴がないのが特徴みたいなのところもあるからな。

RPGでいえば勇者だ。力は戦士に負けて、魔法では魔法使いに負け、素早さじゃ武道家にはかなわないけど、総合したの二番的なわ……」



「なるほくねえ。さっしつか、私こんな格好までしてるのに」

安芸くんの説明が多くて、なかなかエッチな雰囲気にならないね。

まあ、そのほうが安芸くんらしくて、面白いかなとは思っけど……」

「おおっ。すまない加藤。」

このままじゃやけにインタビューが多い、早送り推奨AVみたいになって

俺がユーザーだったら、販売サイトに☆1のレビューを長々書くんだったよ」

「んー。でも別にいいんじゃない。安芸くんは安芸くんのやりかたで。

私はちゃんと協力するから、好きなようにやってよ。

それにじらされたらじらされたで、結果的に女の子のほうも気持ちよくなっちゃう面もあるし」

「ああ、ありがとう。」

よしっしたら、そのパンツを全部脱いで広げてシミを見せてくれ」

「んっ……。はいっ。こんなかんじかな？」

「ああ、バッチシだ……。よく見えるぞ加藤。パンツすっぴい濡れてる。

まだ新しいシミがついて数分ってかんじだぞ。ほんとにじらされて興奮しちゃったのか？」

「……そりゃ濡れるよ。映画のキスシーンですら

そっいうふうになっちゃうことがあるのよ、

面と向かっておまんこなんていわれたこと自体はじめてなんだもん」



「うーむ……。男でいう軽ポッキみたいなものなのかな。

やっぱり加藤も……。その……。オナーリー的な行為はするの？」

「んーんっいう場合どう答えたらいいのかな？

んっ答えるのが正解なんだよっね。

しませんっって頑なに言い張るか……

想像にお任せしますっとかいってまかすのか。

そんなの知らないっ……。っすねっってみるか？」

「さ、そっういふ反応は「ロイン」のキャラっついでんは

正しいっと思いが、できれば本場の「ん」を教えっついでんっ助かる」

「オカズは？ やっぱりネットのAVとかエッチなマンガとかか？」

「まったく見ないといったら嘘になるけど、だいたい寝る前とかお風呂とかでするから、想像が多いんじゃないかな？」

道具といえば、私の場合は一輪車で目覚めちゃったかんじかな。

安芸くんの通ってた学校でも、女の子って一輪車好きな子多かったでしょ？

当時は気づかなかったけど、多分あれってそういう理由が関係してるんだよね」

「そうだったのか……そういえばやけにブームだった気がする。

フムフム、あれは男子でいう登り棒的な、性覚醒遊具だったのか……

勉強になるなあ……これ……じゃあ裏側のニオイも勉強しないとな……」

「あ……やっぱりこれも嗅いじやうんだ」



「ああ……これが加藤の一日分のエキスを吸収したニオイの本体か。

表から嗅ぐより、さすがにクロッチ部分は酸っぱさがきついな。

シミってよりは黄ばみ汚れててかんだし……いつもこのくらいは汚れるのか？」

「うーん。正直もつとひどい時もあるから、これくらいなら

ぜんぜんマシなほうかも。まあ、そういう周期の時は、

パンティーライナー挟んだりするから、直接は汚れないけどね」

「へえ。でもなんだろっこの感じ……臭いのには妙に安心するっていうか

クセになるというか。やっぱり何かフェロモンのなものか、

この加藤のまんこ型に広がった部分に充満してて、本能を刺激するんだっけな」



「不思議だね。自分でも、トイレとかで

なんかエッチなニオイだなあって思うことがある」



「おおっ。これが加藤の生まんこっ！」

まずは正面から……ふんふん……なるほど……

陰毛の形は逆三角形……量は普通よりやや少な目でいったところか」

「うわあ……なんか解説されてる……」

「ああ、すっごく加藤……。すっごくきれいだ。」

やっぱり加藤をヒロインに選んだ俺の目は間違ってたな



ドキ
ドキ

トク
トク

ドキ

ドキ

むん

「へへ……なんか照れちゃうな。」

別段変わりのない普通の下半身だと思っけ……」

「そんなことないさ。ほごよい肉付きいい。」

白くて、ピチピチで、透明感があるっけいっつか。」

……でも、正面からだとか案外肝心なところは見えないもんだな」

「そうだね。温泉とかでも、毛で隠れてるから」

あんまり抵抗なかったりするし、胸のほっぺを中心に隠す人もいるくらいだしね」

「よし……もう少し近づいてみよう……」

おおっ……陰毛に隠れた割れ目は少し隙間の開いた一本筋。

よく見てみるよひんちが閉じてはいないよ……くわっ……おっっ

「ん？ どうしたの？ 安芸くん？」

「いや、勃起しすぎて先っぽがくすれて……イタタタ」



「ほんとだねえ。スポン膨らんでてなんか面白いかも。

男の子はそういう気分になったとき、

すぐ反応しちゃって、いろいろ大変そうだな。朝とかも勝手にそっとなんかして

「……そういう加藤だっけ濡れてるじゃないか。汁が垂れてるんや」

「あーそーだね。

」の格好じゃ隠せないからお互い様かな。

……お部屋の床が汚れちゃったらごめんね」

「それじゃ次は下から覗き込むぞ」

「ふえええ……なんか怖いなあ」

「ふむふむ……。ここから見ると恥骨の膨らみが立体的に見えるのか。

産毛もけつごう下のほじりまで生えてるんだな。

そっか……。お尻の穴は肉に埋もれて、この位置からは見えないんだな。よく覚えておけ」

むちゅ

かたあ

ちゅきゅ

ちゅきゅ

ちゅきゅ

ちゅきゅ

ちゅきゅ

ちゅきゅ

ちゅきゅ

ちゅきゅ

「はうう……。視線が刺さって痛いよ」。

イラスト担当の澤村さんにもこんなまじまじ観察されたことないの……」

「うーん。こうして見るとペラペラは少し外部に露出してん」。

想像よりも肉厚的だ……。これだとモザイクをかける必要があるな」

「ふーん……。私って肉厚的なんだ……」

人と比べたことないからはじめはじめて知ったよ……」

「色素はまだ沈着してないな。きれいな肌色だ。」

日本人……というか、アジア系の大半の大人の女性は

ビラビラが黒ずんできて、いわゆるグロマンの象徴になりやすい。

白人なんかはこうはならず、きれいなままだから、

性交渉の頻度もずっと頻度が高いんじゃないかな。

いやあ……よかった、ヒロインがグロマンでしたじゃ話にならないしな。

加藤、これなら自信をもっていぞ。これなら金返せっていわれることはないだろう」

むちっ



おまんこ

「……そう。気に入ってくれたならよかったよ。」

それより安芸くん……その……お汁がとんとん垂れてきて

少し気になるから、ティッシュで拭き取ってくれると助かるんだけど」

「ああっ。もちろん。ちよつと待つて……」

ティッシュ……ティッシュ……つご。よし拭くぞ……」

ああ……なんか紙ごしてもマン肉のフニっとした感触が伝わってたまんないぞっ

あっ……少し手に絡まっちゃった……ふう……こんなもんかな？「これでいいかな？」

「おーっ。今度は後ろから観察だ。加藤。ベシッと膝をしごいて」

「うっ……うん。どうかな？」

「おおっ。なんか別の生き物みたいだ。貝類というか、唇というか、後ろからのほうが、なんかなまめかしい感じがする。」

「あっ……加藤。肛門にトイレレットペーパーの残りカスがついてるぞ」

「女子校生」

「うん」

「うん」

「うん」

「うん」

「うん」

「うん」

「うん」

「うん」

「うん」

「うん」

「えー。やだあ。あんまりじつくり見ないでよ。」

「……女の子はどうしてもいろんなところ貼っちゃうんだよ。学校のトイレには水で洗う奴っていないし。性器はつかないから、拭き方の向きの違いもあるしね。で……でも毎回じゃないよ。たまにだからねっ」

「うん…… これも…… たほうがいいかも」

「そうだね。汚くて悪いけど、ずっとそんなの」

「つけっぱなしだと集中できないし……お願いしてもいいかな？」

「任せとけっ！ー 俺がお前をチン」がキュンキュンするよんな最高のマニュアルだしてやる」

「はあ……なんかヘンなスイッチ入ってるし……大丈夫かなあ？」

「よし。全部とれたぞ。任務完了」

「ありがとう……ねえ……それはどうして安掛くん……」

「前のほうは……その……カスとかついてない？ 自分じゃわからないから……」

「どうかな……それを見た感じでは今のところさもないかな。

でも中はどうかわからないぞ、確かめてみるからとりあえずくはあを頼む」



「へほあ〜」

「指で、こいつを広げておまんこの中身を見せるあれた。

エロマンガで一番の発明的な擬音……オシマルペンと呼ばれる例の奴だよ。

もともとは違う擬音で使われていたらしいんだが、とある作家さんが

性器を広げるときに頻繁に使うようになっただから、爆発的に広まってたな……」

「そんなの説明されてもわからないよお……」

「とりあえず正面を回して、股を広げてみてくれ。それで指でまんこを挟むかんじで」

「わかった……」

「んっ……んっっ……んっっっ」を聞くのは最高の……」

「そうだ。それがくばあだ。」

いわれてみるとそういう気がしてこないか？」

びらっ…… よりも、奥ゆかしくかかっているのか？」

人の手によって解放される開放感が酌み交わされている感じが」

「んっ……。そういうられるとほんとに……」

そういうえば澤村さんの青年向け同人誌でもそんな文字が描いてあった気が」

「ああ、昔英梨々に教えたのも俺だ。」

あいつも加藤と同じように胸に落ちながら顔を浮かべていたよ」

「だろっね……。男の人の考える……んは女中とほいませう」

でいっけない部分もある」。澤村さんをもっとかかっていた真実を……」



「しかし、エロいな。やっぱり実物の存在感というかが、説得力はすごいよ。」

「パンクの断層になってる部分のグラデーションもすごいけど、造形としての奥行きとか、穴周りのプリプリ感とか、映像で見るとは段違いの迫力があるよ。」

「いや……それよりも気持ちの問題かな。映像で動物を見ても、

それなりに満足するけどさ、やっぱり実物に触れ合ったからってその

愛しささがそこに生まれるっていうか。要するに感動的っていうのかな。自然と目が離せなくなる」

「うーん。そんなたいしたものでもないと思うけどねえ。」

「自分でもたまに汚いなうて思うし。生理とかはけっこううグロいし。」

「たまにかぶれたり、かゆくなったりもするしねえ。」

「きれいなものとは対極にあるイメージだから、褒められても実感沸かないんだよね」

はあ、

いぼず

「そういう知りたくない現実を踏まえても、男にどうでもまんこってのは魅力的なんだよ。汚いとかきれいとか、そういう次元の問題じゃなくて、もはや存在そのものが神なんだ」

「安芸くんがいいなら、そのGYNURUSTY……」

で、どうかな？ なんかカスミがGYNURUSTYかな？」

「そっだった……とれとれ……もうGYNURUSTYだね」

「うっかな……アッ……滑ってなかなか……めねの……」

セクシー

「ねえ……安芸くん。指がへんな感じがするわね……」

「う……いや……いや……そんな感じはなげえ加藤。」

「それとも俺がくせえわね……」

「鼻の下伸ばしてそんないわけだね……」

「ともかく……指の扱いには注意してよね。爪が伸びると傷つけちゃうし……」

「私の膣の穴は、たぶん狭いみたいで、指一本でもけっこう異物感がすごい……」

んんん

んんん

んんん

んんん

「ああ、すまない。気をしけるわ。でもほんと、うっ……」

「糸ひいて粘着質なのに、滑る……」

「……余計に混ざっちゃうんだよね……もうちょいなんだけど……」

んんん

「ア……」

「……」

んんん

「その微妙に、あ……」

「……非常に気が散るんだが……」

「えへへ。覚えておきな……」

「おっ、よしっ。これたぞ加藤。」

水分吸ってほぼ溶けてるかんじだけよ。おん

「わざわざ見せなくていいよお……汚いから隠してあげなよん」

「いや、味見だ。加藤これ食べなよん」

「ええっ？ 本気でいってるの？」

それはちよつと……衛生的にもお勧めできないというか

病気になったら責任取れないというか……やめておいたほうが

うんち

!?

はー

ん

ん

うんち

うんち

むいっ

ト

「大丈夫だって、クニクニマン汁飲むのん」

ぜんぜん変わらないじゃないか。正直のしつこさからすつとカマンしてたんだ」

「ま……マン汁は平気かもしれないけど、それはたぶんもろにおりものだよ？」

子宮から出たゴミというか、不必要なものというか、菌とかついてるだろうし。

タイレクトで食べちゃうのは、さすがにマン汁マールすぎて、ゲームには不向きというか……あーっ」

「そりだな。じゃあぐいあえは口直して、今度はマン汁舐めさせて〜」

「えっと……今いったこともう忘れちゃったのかな？」

「いや、加藤。おりものは食べさせやマン汁舐めさせたけど、

マン汁は十分市民権を得ているくらいだよ。濡れ舐め描写くらいなら

一般マンガでもあるくらいだよ。それを味の違いはせひとも知っておきたい。

それに加藤の「口」だって、クリエイトス赤くなってスルムケ勃起してるし、

糸ひいてアナルまでマン汁垂れまわってるじゃないか。さっき拭いたばっかなのに……」

「んんん」

……

「んんん」

むいっ

「……そりや、まあ二応男子の前でパンを脱いで

嫌ってほど観察されてるんだから

とっしてもエッチな気分になっちゃうよ。生理現象だよ」

「んんんかな？ 口では怒っておきながらも、俺の変態行為に

興奮してそうなってるんじゃないのか？」

直接舐めなくても、舌で口開けてまっければ平気だから。頼む」

「……ハイハイ。じゃあそのしついでに設定は、

もう安芸くんが好きにするわいっしょ。

もう一番恥ずかしいもの食べられちゃうってるんだし。

今更っぱんでもしようがないし、いちいち許可も必要ないから、

私が止めるまでは自由にしなさいよ。

女の子だって、男の子の前でペンチ脱いだり、見るだけで終わらなさんか

くらいわかってるし、その時点でおもてなしの覚悟もできてるんだよねっ

あ、でも、もし、どしどこも嫌なところでも止めるから、そのへんは勘違いしなさんかね」

「……ことは触ったり、直接舐めたりしても……?」

「優しくするならね。女子の体はデリケートなんだから」



「わかった。デリケートに好きしていいことかな? 感謝する。

——早速で悪いが加藤。

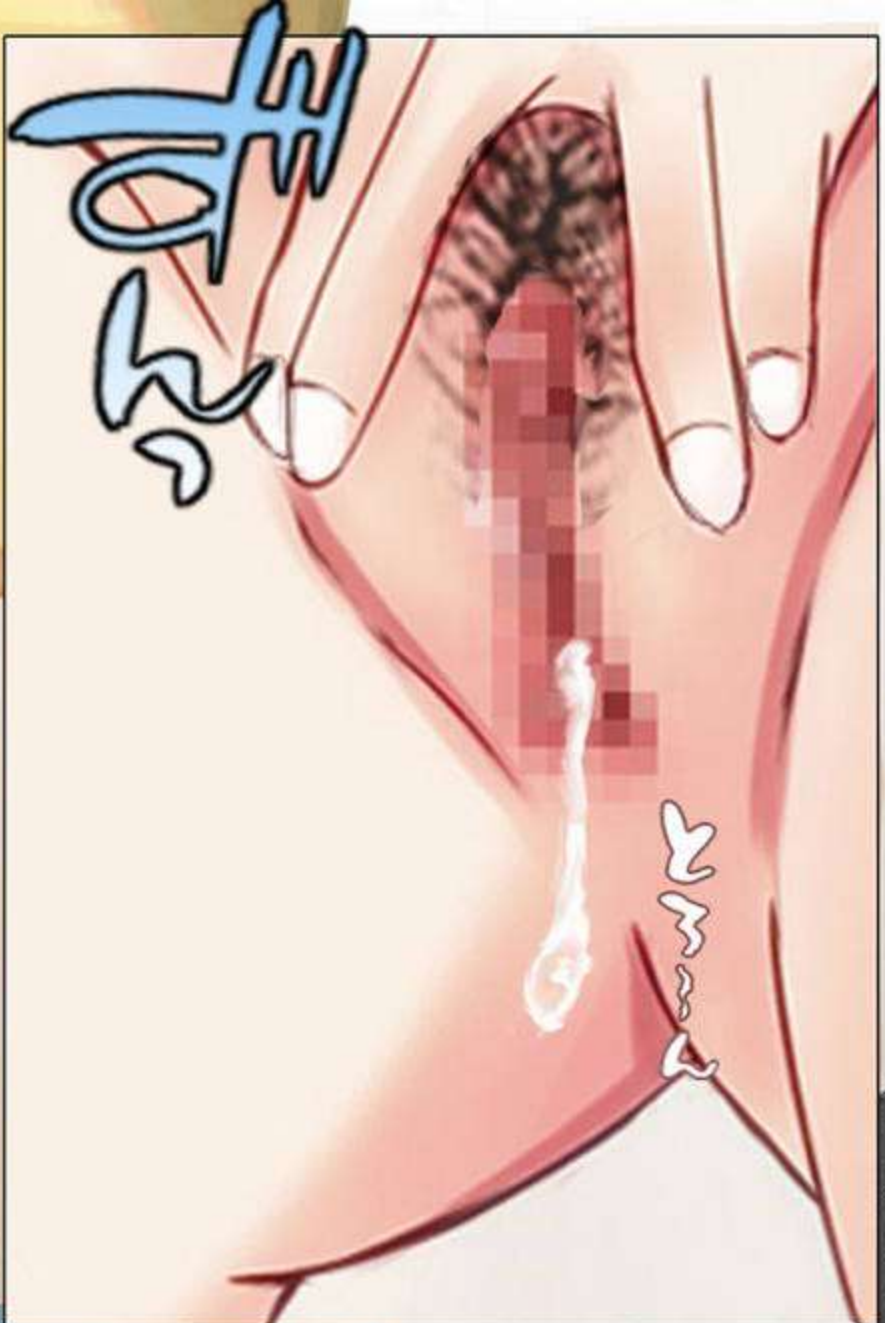
裸になって俺の顔の上にまたがって、ペンチがきかすところじゃな。

それまで俺はベシッで目を瞑って待ってる。準備ができたなら教えていっしょ」

「わかった。じゃあちよつと待ってね」

「あ、靴下はそのままで」

「なにそのくだわり……別にいいから」



「おおっ。すごいー！ すごいぞ加藤っー

おまたの穴がばいばい呼吸するみたいだねっ！ っ！ っ！ っ！ のがわかる。
それに、けっこう胸もあったんだな。

そういえばスリーサイズは上から84 57 83だったもんな。
かなりの高スベックなのを忘れていたよ。おっぱいもかわいいぞ加藤」

「なんで安芸くんが私のスリーサイズを……………」

ああ、澤村さんにきいたんだね。まあいいけどはお願いでなかつたけど



「ああ、すごい。俺は今裸の女のまたぐらに顔をうつらうつらしてるんだ。

まさに夢が叶った瞬間だ。」この時点で半分鐘血を捨てるだとしても過言じゃなからな。加藤

「ハイハイそうだね。半分鐘貞喪失おめでとう、安芸くん。今夜はお赤飯だね。

で、どうかな？ 私のあそこからえっちな汁出てるかな？ 自分じゃよく確認できなからな」

「ああ、穴の先端からマン汁がゆっゆっ……」

「……」



「人のお汁の落ちるスピードを
名作アニメ映画みたいにいわないでくれるかな？」

「仕方ないだろう。ほんとに夢が叶ってる瞬間なんだ！

どうしても変なテンションになっちゃうんだよー ヒャッハーッ

「男の人ってそんなに……に興味あったんだねえ。

うーん……思春期の男の子の性欲を甘く見すぎたよ」



「そのとおりだ加藤。男なんて生き物は、
頭の中は常に女の子の裸でいっぱいなんだよ。
町ですれ違う男はほぼ全員に、加藤の下着や裸を想像されると思っても過言じゃない」

「そっか……たまたま視線を感じることはあるけど
……やっぱりそういう想像されちゃってるんだねえ。
なんか外に出るのが怖くなっちゃったよ。いちいち気にしなくてもいいじゃないか」



「じゃあそろそろ味見を……へろっ……んぶっ……んぐんっ。」

なるほど……これが混じりけのないマン汁の味か。

透明なのはさうっとして抵抗感が少ないし、少ししょっぱいけど意外と無味だな。

でも口の中に入って、自分の唾液と混ぜると、

あとからほのかに甘酸っぱさが広がる。酸度の……んぐんか……これならへろっもめめっも

「そんなスーパーにある、みかんの甘さみたいな評価やめてよ」

「クチクリチュ……ペチヨペチヨ……んっ はあ……このままタイリクトに食入ても
しまじはハムリンでいいだのじゃぶっで触感を楽しみながら汁をすすめるのも
おいしなあ。汗っこっか別の味も混ぜっこ、少しマイルドになっで詰めやわいなんや」

「んっ……知らないっ」

「ほうっ……場所によってもせんせん味が違う。奥にもぐるほど
酸味としよっぱさが濃くなるけど、クリトリス周りなんかは、
マンカスが発酵したイカチース臭が強いし、尿道の部分は少しピリピリ刺激的なえへみを感じん」

「あっ……はっっ……んっ……そっ……」

「……れっれっれっ……ぶっっーやハイこれ止まらないっ」

「すごいチン」にける味だなあ。エロマンガは大げさじゃなかった。
透明な汁と、白濁した汁の違いは、意外とわからないかと思ったんだけど、
なんていうかのどろしが違う。喉にイガイガが絡みつくかんじというか、
後味というか、そういうのは白いほうが上だ。とっだ？ 知ってたか加藤？
自分の体のことなのに、自分じゃわからないだろっ？ 俺しか知らない加藤の秘密だ」

「だからそんなの知らないっしほっし」



「んね……このおっぱい、おっぱい……甘くておいしいわー。
 ぺろっ……ぺろっ……ほじっ……肛門はちちちと味があつー。
 若干苦いけど、そのままで抵抗感ないっつーか……今のレインションならせんせんイケるぞ」

「うん？ そっもっ？ あっ……あんっ
 あんんんん…… お尻やだっ……なにこれっ……お尻ほじられたんやん」



「おっしょー、これが潮っつやっか。
 しゅっぽ……いや苦いっ、おぶっ……だめださすがに全部はカバーできん」

「はあ……はあ……たぶん最初は潮だったけど……
 途中からおっしょっになっちゃうてるかんじかも。よくわからないけど」

「加藤っでももしかして感じやすいのか？ 潮吹くなんてAVだけの世界だと思っただのに」

「自分でもビックリだよ……こんなのはじめてだし……
 あっシート汚しちゃったね。安芸くんの顔もびっしょり」

「あっっっっっっっっ。加藤のお漏りしてシートになりかたが……おっまたっっっっっっっっ」

ゼクッ
ゼクッ

「それじゃ……お詫びに今度は私が気持ちよくしてあげるね」

「それはつまり加藤が俺のチンコを……」

「だめっ……焦らないでっかよ。」

その前にほっ……ちんこもめんどくさっ……」

「……ちんこ」

「鈍いなあ……キで始まるやつだよ。女の子はムードにムードいからな」

ちんこ

ちんこ

ちんこ
ちんこ
ちんこ



「んっ……安芸くんの口に私のエッチな味残ってる」

「ごめんな加藤。ファーストキスがこんな生臭い形で」

「いいよ。そもその原因は私だしね。」

チュ……チュウ……ん……でもこれ気持ちいいよね。

なんか落ち着くっていうか精神的に満たされるっていうか

なんで恋人同士がキスしたがるのかわかった気がするよ……」

ドキ

ドキ

ドキ

ドキ

ドキ

ホッ

ドキ

「ああ……俺も三次元の女子の魅力が

だんだんわかりはじめてきたよ。これじゃオタク失格だよなあ……」

「ふふっ……それって安芸くんにとっては最高の褒め言葉に近いよね」

「そつた加藤。おっぱいを吸う感触も知っておきたい」

「あ、うん。そういえばまだだったね。ハイ吸っていいよ」

ドキ

ドキ

アハハハ

は。

ハハ

ハハ

おっぱい

ドキ

ドキ

アハハハ

アハハハ

んんん

「はむっ……んちゅ……ちゅっ……ちゅー」

ああ……この感触、しつくりくるなあ。赤ちゃんに戻ったみたいだ。

あらゆる物質の中でおっぱいが一番口で吸うのに適した触感の気がする」

「うん。私もなんか、快感ってよりも妙な満足感があるよ。これが母性本能ってやつかもね」

「ほんと女の子の身体ってよくくっくも魅力的だよな」

「おっぱいの柔らかい心地は……なごころの想像より」

柔らかくはないかんじだな。もちこはしこりけと、意外と筋肉もあるというか」

「あ。そういう理想的なのは、もっとFとかHカップとかある人だよ。実際マシユマ回みたいなかんじの人はなかなかいないんじゃないかな。思春期だとまだ成長途中で、中身に固さが残ってる子も多いし、小さい子は寝そべっちゃると、ほぼ平らになってこの腕と柔らかさがあんまかわらないし」

「へえ。乳首も引つ張るとけつこつ伸びるんだな。先におまんこいじっちゃったから感覚麻痺

してると、冷静に考えると俺は今、クラスメイトの女子のおっぱいを自由にいじれてるんだよ……」



「でも、女子っておっぱいをあんまりやらしいものとは思

ってないんだよね。男子があんなに好きなのが不思議な感じだよ。

たぶん電車とかで偶然触られても、そんなにキヤアってかんじにはならない気がする」

「そっぴや、女子同士でも普通におっぱいの会話とかしてるしな。

おまんこの話は、某魔法使い映画の名前をいってはいけないあの人みたいに、タブーなのに」

「水着とかでも乳首以外はほとんど見せてるようなもんだしな。

ちよつと脂肪が多いだけで、皮膚の延長ってかんじじゃないかな。

でも……ハアハア……私、おっぱいでもちゃんと気持ちよくなれるし、

女の子の身体のほうが性感パーツが多くてラッキーかなとかは思ったりするけど」

「ハアハア……俺も、もう我慢できない女加藤。これ早くなんとかして」

「……しょうがないなあ。いいよ。スポン脱いで」

「うわあ……すごい立派なおちんちんだねえ。」

「なんか先のほうが膨らんでて剣みだいになってる……」

「そっなんだよっ！ 加藤っ。昔っから無駄に立派なものぶら下がっててさ修学旅行のお風呂とかで、よくからかわれたりするんだ」

「安芸くん、いかにも包茎っぽい顔してるもんな。スルムケとは一生無縁ってかんじのルックスなのだね？」

「だっ……ここやかましい！ そんな下品な言葉で覚えたんだっ！」

「フッフ……内緒だよ……でもほんとにすごいよ安芸くん。」

「こんなのでかき回されたら……って想像すると反則だよな、これは。」

「んっ……そっかあ安芸くんがモテるのなんかわかつた気がする。」

「女の子って、男の人のパーツの好みで、鎖骨がセクシーとか、

血管にフェチを感じるとか、指がきれいな人が素敵とかいうじゃない？

「アし、全部嘘だからね？ 本音をいっちゃうと顔とおちんちんが9割だよ」

「……そっなのか？」

「そーそー。建前って奴だよ。角が立たないように受け答えてるだけ。」

「まあ、大人になったら、地位とかお金とか関係してくるんだろうけど、

学生のうちは顔とおちんちんが、ほぼすべてだよ。あとは「の次だね。」

「男子だって、巨乳でかわいい子に告白されたら、とりあえず付き合おうってしよっか？」

「う……確かに……普通そんなおいしいチャンスがあったら飛びつくかも」

「それと同じで、女の子も本能的に、イケメンとデカチンに弱い子多いんだと思うよ実際」

「うわあ……知りたくなかったよそんな裏事情」

んんん

んんん

んんん

お

「でも安芸くん、オタクにしてはわりと清潔感あるきれいな顔をしてるし、なんだかんだ優しくして、こっちの事情とかもわかってくれてるし、ましてや、男の子の部分に、こんな秘密兵器持ってるって知ったら、そりゃ先輩も澤村さんも夢中になっちゃうよね？」
「あ、いえいえ、キャット萌えってご自分のかな？」

「あの二人の事情は置いておいて……」
サンキュー加藤。お世辞でもそついわれると自信がもてるよ



「じゃあ、ちょっとおっぱいの間に挟むね？ もう少し大きくなりそうだし」

「ああ、頼む。しかし加藤が自分からバイスリ
してくれるなんて、だいぶ照れがなくなってきたな」

「あ……なんかスイッチ入っちゃったみたい。女の子もおちんちんの
発情したニオイで、ちゃんと頭が酔っ払うように作られてるからね。」

男と女とちかだけがエッチだったら、人類いなくなっちゃうし、そこらへんは平等だよ」

「マジか。神様……女の子もちゃんとエッチな生き物に創ってくれてありがとっ」

「じゃあ……んんんん……後回しかな……」

「おめ……んん……んん……」

「カア……」

「ミ……」

「ギンギン……」

「ギン……」

「ギン……」

「ぴ……」

「そのまえに、私も女中なのもあるから、よく観察ねえよ。」

「異性の性器に興味あるのは一緒だし、こんな近くで見ると男も女も同じじゃないかしら？」

「ああ、いくらでも見てくれ。自分でもペニスのことも」

「オイがわかるから、加藤の距離だと、かなりすげえことになるんじゃないか？」

「うん。カリの部分に張り付いた白いカスがまた蒸れて」

「オスこかんのPHロマンゼンも、JELLYのGUMも、揚げたての」

「フライドポテトみたいな香臭い」オスがするんは、これが精子の素なのかな？ ガマン汁？」

「そっか。そんな美味いものならオトかきかかかかか」

「それが全部射精されるん、栗の花みたいな刺激臭に変化するんだ」

「んんんん」

「おっぱい」

「んん」

「んん」

「んん」

「おっぱい」

「んん」

「んん」

「んん」

「ふうん……おちんちんの「オイ」にも段階ってモノがあるんだね。つていつか……これ口の中に全部入るかなあ？」

「歯医者さんのときくらい大きくあけないと無理じゃない？ これ」

「あのさ加藤、一ツ疑問なんだけど、今の女子は「ヘルメットの抵抗なのか？」



「んーえっと、どうだよね。最初は確かヘルメットの抵抗だよ、たぶん求められたらようほど不潔で臭いのじゃない限り、普通にする子が多いんじゃないかな。」

「だって、基本男の子の感じるヘルメット、ヘルメットがなければ、おちんちんいっしょにあけなかったら、他に何をなんなんだろう、股だけ開いて、すいて愛身ヘルメットの抵抗はヘルメットはなんだろうかな」

「なるほど、男女平等社会の理想がヘルメット……まあ、物は試しで、ヘルメットを脱いでみるわ」

「そっだね。下手なうたがめんな。じゃあ……失礼しまーす」



「おちんちん」
「ヘルメット」
「ギンギン」
「ギョッ」
「ギョッ」

「へろへろへろっ……ん！ あゝなんか感触が面白いねー。
柔らかい「ム」って言うか、あつたかくて、舌がべっとり張り付くね」

「おおっ……これが舌が、チン」を捉える感触なのか……」

「んっ……ふう……とんがんじっ」

（ハ）

「なんかっ、感覚が遠くて、意外と実感がないかも……」

でも「の申」訳なぞと、背徳感と、すべてを支配

してゐるかのような王様感が入り交ざった感情がたまらなくソワソワする」

「裏のフツとが、尿道の入り口とかが……れるんっ……気持ちいいんぢやね？」

「うしいけどなあ……すまん加藤。興奮しすぎて、その細かい差を判別する能力が今の俺にはないっ」

「あー私も舐められたんだけどさあ……さあ……全体がじわーっって麻痺してしまふね」

（は）
（ほ）

（は）

（ぽ）
（ぽ）

（ん）

（ん）

（ん）

（ん）

（ん）
（ん）
（ん）

（ん）
（ん）

（ん）
（ん）

（ん）

（ん）

（ん）

（ん）

「ああ、頼む。ぜひとも集中しなれ。」

「たまにフェラしながら普通に喋ってるエロ漫画があるけど、

あれってせつたい聞き取れないから変だよなーとは思ってたけど、こうなんだ」

「アハハハ、アハハハ……アハハ……アハハ……アハハハ……アハハハ」

「おおっ……これが……加藤の口の中……あったかくて……溶けちゃいそうだ」

「アハハハ……アハハハ……アハハハ……アハハハ……アハハハ」

「ああ……さばさば……最高すぎる……でも加藤……もっ……手……」

「アハハハ……アハハハ……アハハハ……アハハハ……アハハハ……アハハハ」

「アハハ……あああ……アハハハハハハハハハ……アハハハハハハハハハ」

「アハハ……アハハ……アハハ……アハハ……」

「ああ……加藤さんの激アハハハハハハハハハ……アハハハハハハハハハ……アハハハハハハハハハ」

「アハハハ……アハハハハハハハハハ……アハハハ……アハハハハハハハハハ」

アハハ
アハハ

アハハハ

アハハハハハハハハハ

アハハハ

アハハハハハハハハハ

アハハハハハハハハハ

アハハハ

アハハハハハハハハハ

アハハハハハハハハハ

「んはあ……ちよっと飲んじゃった。うえええ。生臭くて、うめいわい」
精液まじりの安芸くん……うめええ、私これ全部飲むのはちよっと無理そっ……」

「うざ、(うしろ)をうめええ、普通のロのおも田じゃっかん。
はっ、ティンティン。(うしろ)田じゃっかん。でも最高に気持ちよかったよ」

「へっ……へへへ。うん、だったわよがっかっか」

「けど、あつちも痛くて疲れるし、私(うしろ)手オ苦手かもしれない。けっこっハードル高いね」

「雑器入りのアンケータだよ、仕方なら(うしろ)おまはるかごじだもごな」

「んっ正直じゃないなら、そのおまが助かるかもしれないね」

「は……まだ喉がひつかかるかんじだよ。ほんごなんとも例えがたい味だよねこれ」

「カウパーは思ったより抵抗感ないし、(うしろ)かなんか思ったけど、精液と比べたら」

「味噌汁と生の味噌の違い、せつせつと違うね。うざー田見たいよ。安芸くん、よく私の食べたねえ」

「まあ精液よりは田じゃっかっか。俺も自分の味噌汁かなんかあるからわかるよ」

「ヒロマンガみたかった、(うしろ)れが平気で飲めるようになったら、正直正路のピッチだと思って思った」



「へえ。やっぱり男の人も自分で舐めてみたりするんだ？」安芸くん変態だね」

「そういう加藤はどうなんだよ。オナってるとき、自分の味って興味持ったりしないか？」

「まあね。ちょっと入っロレとしてみたいとはあるけど、よくわかんなかったよ」

「それより加藤……」発抜いたのにぜんぜん納まってないんだが

正確にいうと……サーズンまみれの加藤を見て、超スピードで回復してしまったんだが

「あゝ。若者の証拠だね。じゃあ……最後までしちゃおうか」

「――？ いいのが加藤っ」

「エッチするのはいいけど安芸くん、人のほっぺにおちんちん押し付けて遊ぶの止められないかな？」

「すまん。興奮が先走って見切り発車してしまった」

「まあサークルに入ったときから、いつか安芸くんの童貞を貰う日がくるんじゃないかなとは思ってたし、逆に今を逃したらまた同じムードでシチュエーション作るのも難しかったし、きつと今がベストだよ」

「加藤くおまえってやつは……やっぱり女神だったんだな」

「アハハ……うしろ向きだけ調子のいいと聞いておね男の人って。

けど、そういうおね男がかわいらしかったら私もするんだからね。それじゃあ、おね男はほんとに可愛いね」

しゅん

おはっ

あっ

すー

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ガッ

「ふっ、加藤のおまんこをアナルに包まわって、穴にロケットエンジンをつけておきなな。」

「アナルのまま、お尻の穴に挿れこんだおんな。」

「大丈夫か加藤？ 痛くないか？ 体重乗せるんや。」

「うん……あんなお尻がほしい。」

「平気……きこ……おっ……そのまんま。」

アッ

アッ

アッ

アッ

ドキ

ドキ

アッ

ドキ

ドキ

アッ

アッ



ガッ!!!

ゴッ!!!

「おっ……なんだこれ……少しすっ加藤の中に……
あー中ぎっし……はじかれるなあ……加藤もう少し力抜いてくれっ」

「ふっ……ふっ……」

そんなこといわれてもこれだけ大きいと……
どうしてもかまえちゃうよ……

んっ……んふっ……あゝもとかしいなあ……

ねえ安芸くん……遠慮しないで

もう最後までぶすっといっちゃっていいよ……

ゆっくりでも一気にでも痛いのは同じだし……

私5秒だけガマンするからその間に決着つけよう」

ズキ

ズキ

おっ!!!
あゝ!!!
ゴッ!!!

ゴッ!!!

ゴッ!!!



「……すまん加藤。もう二度いつてくれないか？ 今、中HOBといっし空耳がきこえた気がしたんだぜ」

「ああ、えつと、私処女じゃないよって発言のことかな？」

前「のNNOのオフ会で知り合って、そのまま流れでしたことがあるから」

「……？ まさか流行のオフバってやつか？」

「あーうん。そうかもね。周りの子も彼氏持ち増えてきて」

話が合わなくなってきたから、私も早く体験したかった」

相手も大人っぽい大学生でイケメンだったから、ちよつといいかなくて」

あー

イエーイ！ 恵ちゃんの
初めてもらっちゃいましたー
ほらほら女になった記念の
ピースして ピース

せせ

ハハ

あー

今初生ハメも
いただいてまーす
さつきゴムハメで出した
精液ももつたないんで
記念に吸わせてまーす

「加藤……おまえ……いつもヌマホをいじってると思ったらそんなことをしたのか……」

「でもその相手が最低な人で、行為をビデオに撮られちゃったんだよね。」

水着「ヌさせられたり、テンマっていつのかな？ おもちや使われたりで、

消してくれるまで相手するの大変で、そのあともしっこがったよ。」

やっぱりネットで簡単に相手を信用するものじゃないよね。」

オタクの人って処女が好きな子が多いらしいから、たぶん安芸くんも

そうかと思って、今まで黙ってたんだけど、もしかして、いわないほうがよかったの？」

「ふわあめあめっ……ななっくをいこへくれたんだ加藤っ……」

畜生っ！ 前々からチヨロい女だとは思っていたが……これだから三次元はっ……
いいが加藤、それはメインヒロインとしてもっともやっつてはいけないことなんだっ！
昔、とあるマンガでヒロインが非処女を匂わせただけで、
作者に大量の脅迫状が送られ、休載をよぎなくされ、

ネットでは破られ引き裂かれた単行本・CD・DVDの画像が巡回す、

某掲示板のスレは荒れに荒れ、関係各社には迷惑メールの嵐。

一度オタクの屈折した感情の標的物にされるく、もう何もかもおしまいなだっ！……」

「そんななの？ だってその時はこっちの世界の……」

ぜんぜん知らなかったし、

「このくらい今の女子●生の生活ではけっこうあたりまえだよ？」

じゃあ今度は 加藤ちゃんの
初デンマでーす
スイッチ強にいれまーす
腰動かすのも忘れずにね



おっ

おっ

おっ

おっ

おっ

おっ

おっ

おっ

おっ

「そんな一般人の事情は知ったことかっ。いいかっ？」

彼らキモオタが過ぎ去った地にはもう草も生えないんだっ。

その作者やメーカーは一生涯許されないと考えていい。

無論声優やアイドル、ギャルゲのヒロインであっても同じだ。

結婚が許されるのは30半ばを過ぎてからで、それまで

彼女たちは自分だけに振り向く対象でなければならぬんだよっ！

それを……くそっ……加藤恵っ……！

「だましてくれたなアアアア……」

おっ

ハイ ラクガキ記念撮影終了
ふー結局4発しか出なかったぜ
正の字完成させたかったなあ
あーこれ水性だからすぐ落ちるし
もうシャワー浴びてきていいよ

あの……ビデオちゃんと
消してくれましたよね？
絶対ネットにアップとか……

だいたいさあ一人の子に
そんな時間とる暇とかないしねえ
加藤ちゃんかわいっていつても
顔はせいぜい中の上ってかんじだし
特徴なくて話もつまんねーし
そこまで価値ないからね？ 実際

基本処女はその後がめんどろだから
食ったら即ボイだよな やつたら
彼女にでもなれると思ってるピッチが
多くて笑うしかねーわ
ひどいと思うかもしれないけど
顔だけで選ぶそっちも悪いじゃん？

消した消したっ 俺ハメ撮りプレイとか
その映像見せながら
パコパコするのが好きただけだからね
ちゃんと学生証もみせたっしょ？
なんかあったら探して訴えていいから

グニャッ

ズツッ……

祝開穴 →

正 不便器

上履……

おーす

ズツッ

ズツ

はな

セセ

I love sex

上等！
使用済み
マコ

↓

お……

お……

えっと……はい

疑ってすみませんでした
セックス教えてもらって
どうもありがとう
ごさいました

お互い気持ちよかったんだし
それでおしまいでいいじゃん？
いい社会勉強になったっしょ？
だいたいすぐ股開く女とかさー
男にしたらまじゴミだからさ
加藤ちゃんも気をつけたほうがいいよ
一回くらいならまだ取り返しつくしさ
つか疑われて気分悪いし謝ってよ
あと処女賣ってやったお礼もまだだし

ガッ!!!

「よへも……おっおっ……終わりたい……裏切り……」

「あん……急で激しい……安芸くん？　おい、安芸くん……」

「ん……この穴に……別の男の……ちきじょう……」

「……」

「ん……ねえ、きいてよ安芸くん。全部冗談だっつば。」

私ちゃんごきままで処女だよ。

>// 普段振り回されてるお返しに、

ちよつと安芸くんをからかってみただけだよ。

……こんなに取り乱すんだったら、

止めておけばよかった。意地悪してめんな安芸くん」と

イキイキ

おん

ん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

「な……ほ……本当か？」

「別に初めてだからって血が出るわけじゃないしね。」

むしろ出ない子のほうが多いみたいなの話も聞くし、

そんなに信用できないなら、破れたての処女膜見てみればいいんじゃない？」

おん

おん

おん

おん

おん

おん

「俺にそんなNTR的屬性はないっ！ 確かに昔そういつたアイデア

出したらもうお母さん、お姉ちゃんも売れるからさ、現実ではほんとカンベンして欲しいわ」

「でもきいたとき、おちんちん余計に固くなってなかった？ 嫉妬してくれてるのかなって」

「うん…… 断じてそんなことはないっ」

「そっか……なら気のせいかな？」

「じゃあ疑いも晴れたところで、気を取り直して、再開してんのかな」

ひんびく♡

どろろ…♡

は！
はぁ…

うー

は！

わわ
わわ

んき

んき

んき

「後ろを向け加藤。俺を怒らせたバツだ。

もう遠慮しないぞ。好きなだけ欲望をぶちまけてやるから覚悟しろっ！」

「え……ちよこ……お母さん……っ」

「あつ……アツ……んっっ……安芸くん……そんなに……」

「激しく突いたら……痛いっ……一回……数分間おちんちん挿っただけ……」

「私……まだ完全だ……パーシ卒業してないんだっ……もうちみっく優しく……」

「それじゃおしおきにならないだろ加藤。」

「この世には絶対にしてはあげないアツキッというものがあるとだよ」

「だから……あんっ……アツキ……アツキ……」

「同意のないセックスは……いっつも知り合い同士でも……アツキになるんだっ……」

あしっ

「アツキ……加藤。なんだがアツキの締めはは……」

「おちんちん……加藤の……アツキの……おちんちん……アツキ……」

「無理が……アツキ……アツキ……アツキ……アツキ……アツキ……アツキ……アツキ……アツキ……」

「あつ……アツ……アツ……アツ……アツ……アツ……アツ……アツ……アツ……」

「違うもん……安芸くん……アツキ……アツキ……アツキ……アツキ……アツキ……」

「主人公みたいな口調になってるよ？……一回おちんちん抜いちゃお」

「同人マンガの冴えない主人公みたいな口調でけっこんだ。

それにさっきから、おちんちん、おちんちん、かわいらしくいいやがって、挿れられてる時はチンポっていうんだ。それが冴えてる同人マンガのヒロインってやつだぞ加藤」

「ええっ……私も同人マンガのヒロイン設定になっちゃうの……？」

おちんちん

「いやなら別にいいんだぞっ……このまま……フンッ……続けるだけだ」

「んっ……んわっ……くひっ……わ……わかったよ……いっからあ……」

おち……オチンポ抜いてよ安井くんっ……一回休ませてくださいっ……お願いっ」



「あーん。さあさあ。俺は約束は必ず守る男だからな」

「ほう……助かったな……うん……」

「……………」

「ん？ 女……」

ぬい

30

ぬい

ん

!?

木

ん……

「……5……4……」

「えい……それ……」

ん

「よしっ。仕上げは、巻で話題の種付けプレスだ。一度やってみたかったんだこれ」

「あんっ……いいよ。安芸くんは精子のびーびー出っくん。ほらっ……子宮がコンコンノックされて、入り口をズンズンめかせるよ……これオチンポ迎えに降りてきてるんだよ。子宮が勃起するよ……」

「ああっ……まじっよ加藤っ！ ぐみだぐみ吸っせえンVEN」



「あっ……すごい……Gスポットこすられながら……かき回すの……だめっ……らめっ……あっ
奥……ホルチオ圧迫されて……あっイクっ……イクっ……おっ……ん……あ……あっ……」

「えっ……ちよっこ……待て……加藤おおおおっ……」

「……おっ……おひっ……ふーっ……ハア……ハア……ごめん安芸くん……」

「我慢できないで先にイッっちゃったよ……頭賣っ白で二瞬意識しなかった……」

「ムムム……ムムム……加藤のイヤな膣の振動で

強制的に絞られる……もうダメだ……気持ちのいいNEED……」

「んっ……はぁ……ねえ……安芸くんの良い顔見せて……」

最初の膣内射精なんだから、苗字じゃなくて私の名前呼びながら出して……」



かっ……

ムムム

ムムム

ムムム……

ムムム

ムムム

ムムム

「おなだ……おみ……おみ……おみ……加藤……じゃなくん思っ……」

「んっ……おん……おん……」

「ムムム……ムムム……ムムム……」

数カ月後……

「はい、安芸くん。いわれたとおりには片方だけ処理しないでおいたよ。

左がすっと伸ばしてあるほうで、右は、まだ剃ってから2日目のかんじかな。

ワキの毛生やすくらいは別にいいけど、夏だから気づかれないようにするのが大変だったよ」

「おおっ……これが10日間伸びっぱなしの加藤のワキか。

もう片方の自然なシヨリ腋具合も抜群じゃないか。

やっぱり女の子もちゃんと無駄毛が生えるんだな。なんか、キドキソな

「男子より女子のほうが成長早いし、先に生えてくるからねえ。足だって、指だって、

背中だって、人によってはおヒゲだって生えたりするし、皆きれいに処理してるだけだよ」



「そっか、同じ人間だもんな。二次元の女の子に慣れると、

どうもそう入んの感覚が鈍るというか、女の子を神聖視してしまっただよな」

「実際それを押し付けられる側はいい迷惑だよな」

「普通にカミツリで剃ってるのか？」

「昔はそうだったけど、剃り残しが目立ったりするから、最近は脱毛器みたいなのも使ってるよ。

自宅で出来るレーザーみたいなの。でも安物だから足とかはいいんだけど、

ワキはやりにくいんだよね。大人になったらワキだけでも永久脱毛とかやってもうおっかなと思っ

「そっか、ずっと生えてないってのもそれはそれで悲しいな」

「永久脱毛っていつても、もう永遠に生えてこないってわけじゃないらしいけど。でも量が減るだけでもだいぶ助かるから」

「へえ……あっ……ふへ見ると乳毛も生えてないか？」

「ああ、ほんとだね。なんかおっぱいに毛が生えるとマヌケだよな。」

「ごうへんの毛は剃るといっつか抜くほうが多いんだけど、それでもたまに出てくる気がするなあ」



「うーん乳毛ってジャンルはまだ確立されてないような気がするし、これを突き詰めればフンちゃんあるかもしれないぞ」

「……ないない。そんなのに興奮するのは安芸くんだけだよ」

「いや、わからないぞ加藤。ワキ毛にこれだけニースがあるんだから、

乳毛にできないってことにはない。だいたい、バイオニアっていうのは最初は馬鹿にされるけど、いざとなれば

「けど、たいていそのまま馬鹿にされたまま終わると思うんだけど……」

「まあいい。恒例のニオイチェックだ」

「あゝすっぱいなあ。鼻腔にツーンとする。」

夏はツキガじゃなくても、この酸っぱさを味わえるからたまらないよ

「朝シャワー浴びても、お昼には少し匂ったりするのよね、この季節は。」

あんまり人と比べたことないからわからないけど、私って、もしかして体臭あるほうなのかな？」

「他人がどうかはともかく、けっこん全体的に臭いぞ加藤は」

「ええっ……やだっ。ほんとに？ えーシヨックなんだけど。」

「ぜんぜん知らなかった。そこはウソでもそんなことないってほしかったよ……」



「だって本当に臭くない人は、この季節でもぜんぜん嫌な臭いささせてなさそうじゃないか？」

加藤はちゃんこっちの要求とおりの臭いに仕上げてきてくれるから、俺としては助かるよ。さすが加藤だ」

「そこ褒められてもぜんぜん嬉しくないよ……」

「何いってるんだ加藤。ニオイがあるのは異性として魅力的な証拠だよ。」

まったく匂いがしなかったら、つまらないじゃないか。食事だって

鼻をつまんで食べたなら、まったく味がしないのと同じだよ。ちゃんとフェロモンが出てるんだよ」

「だっていいじゃん……」

「むしろ……。そのフェロモンを舐めて確認してる。ツキから一番エキス出るといっからな」

「あー。気持ちよかった。加藤も俺に揉まれるようになってから
少しおっぱい大きくなった気がするけど、実際のところどうなんだ？」

「えっと……どうかな。そういえば最近ブラのサイズがきついような
気がしないでもないけど、サイズあげるほど困ってもないし、誤差の範囲かもね」

「そっか、でも感度は確実にあがってるよな」

「うーん、そうだね。もともと男の人の気を引くために大きくなってたわけだし」



おっぱい

お尻

おまんこ

お乳首

お陰毛

お乳輪

お乳首

おまんこ

お尻

「ああ、そうだ。ちなみにこのワキ見せ構図は加工して、
ポテ腹母乳シーンにも利用しようと思ってるんだ。
もつとはちきれんばかりのロケットおっぱい差分にして、
乳首周りはレイヤーで乗算して黒ずませてだな……こう人妻感を前面に……」

「母乳需要はなんとなくわかる気がするけど、ポテ腹は必要なの？」

「おめいごうごめいごうだ」

「なんかとんとん違ったゲームになっていく気が……心配だなあ」

後日……

「サンプルできたぞ加藤、見てくれ、まずこれが普通の母乳差分だ。さしずめ、激しいエッチのあと、止まらなくなった母乳を気にするヒロインのシャワーシーンといったところだろう。このあと主人公が乱入して張ったお乳を揉みながら立ちバック2回戦に突入いったのがよくあるパターンだな」

「うわあ……さすがにこれやりすぎじゃない？ 私何カッパになっちゃったの？」

あんっ……せつっ
おっぱい止まらないよお
まったく……これじゃ
とちが赤ん坊なんだか
わからないじゃない……
はあ……でも気持ちよかった

「うわあから大げさなうわあをひきよいてたよ。」

母乳が止まらないのはミルクと同じで男の夢も詰まってるんだからな」

「なるほどねえ。確かにこれなら赤ちゃんの分以外にも、たくさん出そうだよねえ」

SAMPLE

「次にボテ腹母乳シーン」

「わあ……一気にくろくなつたねえ。

乳首が黒ずんで、周りのぼつぼつまで増える。

お腹の肉で埋もれて、アソコの毛も見えなくなっちゃったね。

たくさん母乳でてるうちに、こんなお腹大きくなるってことは、

一人目産んですぐに妊娠しちゃったんだろうね。

将来子供産んだら、私もこんなふうになっちゃうのかなあ。ちよっと怖いね」



ふー子宮あんなに刺激されたら
お腹の赤ちゃん
びくびくしちゃうよね
でも止められないんだよねえ
ママ淫乱でめね……

「そつた加藤。そつた加藤に、ユーザーに想像をさせて愉しませる含みの部分も重要なんだ」

「へえ。奥が深いんだねえ……」

「妊娠中は、男にしてみても中出しは放置してこのポイントが大事」

「いろんなニーズがあるもんだね。

でも妊娠中の中出しは、けっこう危険らしいからゲームだけにしておいてね」

おっぱい

おっぱい

おっぱい

おっぱい

SAMPLE

「こんなのも作ってみた。黒ギャルポテ腹バージョン。」

「これはより実際の画面に近づけるため、窓枠付で見くれ」

「ん〜……それはいいけど、なんか一気に方向性が

迷走してるかんじがあるよね。セリフもすくなく下品だし、

ぜんぜんキャラが変わっちゃったっていうか、完全別ルートなのかな？」



「ああ、オタクは現実のギャルは苦手だが、その反動なのか

二次元のギャルにはやたら興奮するユーザーもけっこういて、

こうみえて需要があったりするんだ。実際ゲームに使うかどうか別としても」

「あーそうだねー。現実ではできない反動を二次元でするっていうのはあるかもしれないね」

恵

おっ……なんだよ。まだチンポミルク出したりねーのかよ？ しょーがねーな。まあいつか、こっちもまだ疼いて乳とまんねーで困ってたところだったからさ。いいぜ。ちょっと待ってな。今小便したら、ソッコー穴使わせてやっから。ああん？ 風呂場で小便するなって？ うっせーなバカ。流せば一緒だろうが。あーそうだ、ここなら汚れてもいいから、特別にケツマンコも使わせてやるけど、どーする？

「これって、全身落書きを弄つてくおもちゃイキ地獄バージョン」

「んーさすがにこれはちよつとひどいんじゃないかな？」

「このお腹だと、たぶん来月には二人目のお母さんになるのに、こんな変態ビッチじゃ、ちやんと子育てできないと思うで、子供がかわいそうだよ。なんだか虐待を疑ってしまってる……」

「でも、その頭入股の縫合にククククってなんか？ 母である女の子を選んだみたいな。」

「あーん、普段は誰のちやんとしたお母さんかをさっさとこぼさなければ、夜は……」



「百歩譲って、他のキャラならさっさと見れるかもしれないけど、この子は」

「私がモデルだから客観的に判断できないんだよね。あんまりひどい扱いはして欲しくないなあ……」

「そっちなあ。まあ考慮してあげよ」

「まあでも、着々と製作が進んでいるようじゃなかったよ」

「おはねだの、おはねだの、おはねだの、おはねだの」

「冬目指して、頑張るからね。おはねだ」

「あーっ……(´Д`)なら誰もいないぞ。

早くパンツ下ろして、女の子の日の加藤のアン」見せてくれ」

「……なんか安芸くんのアエチ具合も、どうどう

ひっこみのつかないところまできちゃったかんじだよな」

「そうか？ 女子の生理に興味を抱くのは極めて正常な男の思考だと思うが？」

「でも実際血が出てるところ見たがるのはごく少ないと思うんだけど……

しかも学校で。それも見やすいようにパイパン指定でなんて、

きつと結婚してる夫婦の間でも、なかなかありえないシチュエーションだよな」

ぽん

「露出の心境を知っておくのも大事だしな。この経験がよりよいゲームへの礎のなるんだよ」

「なんだかなー。まあ、それに付き合う私もどうかしてると思うけど……」

「人と同じことをしていたら、一流のクリエイターにはなれないからな。」こを踏み込めるか、
とどまるかで、そうなれるかどうかが決まるんだ。チャンスは神様には前髪しかないというだろう」

「うーん……なんだかよくわからないけど、とりあえず人來ると困るから

さっさと脱ぐね。でも、ひかないでね？」

「日目と真ん中がかなりひどいことになってるし、男子には刺激が強いと思うよ」

「ああ、加藤の体調もいつもよりだるそうだな。大丈夫。さっさとすまじちゃおう」

「はいっ。これが女の子の生理だよ安芸くん。月に一度っっていうけど、始まったら」

実際に、6日はナプキン手ばなせないから、確率的にはクラス的女子5人に1人は生理って感覚だよな」

「うわあ……すごい生々しいな。鉄臭くて、レバーみたいなものびりっついてっ」

確かに、わかってても刺激が強い……でも、女子はこの光景が日常なんだよな」

「だからいったのに。もういいかな？ 満足した？」

「いや、できれば実際血が垂れてるところも見たいんだが、そのためのバイパンだし」

「んー。うまげてるかなあ。自分の意思で出すわけじゃないし、」

わざわざ出るの待ったことなんかないから、うまげいくかわからないけど」

カー

④

⑤

「田へる感覚はわかるのか？」

「えっと、多い目なら起きればだいたいわかるかなあ。立ち上がったときとかは特にドバっとな。」

あとは、なんていうか、出た感触でわかるんじゃないかと、ナプキンに血が漏れる感覚でわかる時もあるし」

「あーっっっったあーっかかも田へるとだめなっ」

「うん。普通に便器の中に血が混じってるしね。」

あのホラーなかんじは、初潮からしばらく経っても慣れなかったよ。」

なるべく中は見ないようにして流してたなあ。もう6年田だからさすがにさっしゅんさっしゅんもなげんね」

おまんこ

むあ

ういっ

す

うて

「だって、精子と出会わず捨てられたらこころ卵子の残骸って

なんかかわいいそうじゃないか。この世で結ばれずとも、せめて、

ナブキンの上でだけでも精子と出会わせてやるべきじゃないか。そうだろ？ 加藤」

「かわいいそうなのは安堵への頭の痛み。

「勝手におなかへいっちゃったの………でももうちんちんを吐いてるよ」

カーン

むず

（汗）

（汗）

ずん

（汗）

「あー。やばい。外この緊張もめっ、はやくもイキをひた」

「あつ……制服だけにはかけないかね？」

「あつ……イクミ……40秒で射精すめ」



(もう……安かへんてこぼ……ほとんじやあつもりんだ……)

リハーサルして……このままナブキン交換しないで履いちゃおうかな)



(サーメンパンツ履いたまま、友達とおしゃべりしたり、
買い物したり、家族とご飯を食べたりかあ……どんな気分なのかな。
お父さんも、まさか娘がもう経験済みで、サーメンで汚されたままトースト食べてると思わないよね)

「あー、加藤ねえ。さっさと帰るなよ」

「あー……鈴木君。あー、えっと……ちよつとね。」

人と待ち合わせ的な……鈴木君は部活？ 野球部だよな」

「おう。ちよつとくしギョウ取れそつだね。先輩も最後の夏で気合入ってるよ」

今年はお回戦くらいまではいけると思っせ。加藤さんも暇なら応援きんねいな」

「うん。行けたら行くね。いいね。なんか青春だね。私も何か部活やっておけばよかったな」

「でも加藤さん、最近、安芸とか澤村さんとかと

なんかやごんじやないの？ よしみるてるの見かけるから」



「うん。まあ、とあるサークル活動というか。

遊んでるだけというか……といつても私はほとんどなにもしないんだけど……」

「えーなにを。あー、もし行かなきゃだわ。じゃあめ」

「うん。頑張ってるね」

「はわあわわ。あそこにはサーメン挟んだまま、クラスの男子と話しちゃったよ。

やばい……これ……心臓が痛い……膝がガクガクして、腰が抜けるかと思った。

こんなドキドキするの一日中なんて絶対もたないよ……えっちすぎるよ安芸くん……無理だよあ

「んーポテもいけど、やっぱり加藤はその髪型でなくちゃ

しつくりしないよな。よし、それじゃトイレシーンの観察を始めるぞ加藤」

「はあ……もっとなんかでもいいだよ」

「あれっ……加藤がおりものシートしてるなんて珍しいな」

「かぶれやすいから、普段は避けてるんだけどね。」

でも体育の授業ある日なんかは、特に汚れやすいからつけたりするかな」



「確かにすごい吸収してるな」

「なんか処女じゃなくなってるから、一段と汚れやすくなった気がする。フタがなくなっちゃったからかな」

「授業中もエロいことばっか考えてるからじゃないか?」

「前に比べればそうかもね。むらむらする回数増えたかも。安眠へのせいだよ」

「いい傾向じゃないか。退屈な授業中ちんこの妄想をする女子〇生。実になまめかしい」

「いじからず早く済ませよう。せり縮むのをひたし」

「おっ……少し苦味と塩気があるけど、なんだ……意外とさっぱりして、

ぜんぜん抵抗感ないぞ、これならいつ海で漂流してもお互いのおしっこ飲みあって余裕で助かるレベルだっ

「へえ、そうなんだ。まあ飲尿療法とかあるくらいだしね」

「ああ、飲むまでは信じてなかったけどこれなら……おっっ……うぶっ……おげえ」

「ん？ 安芸くん？ 顔色悪いけど大丈夫？」

「くっ……迂闊だった。これは畏だ……尿の奴、口当たりこそまるやかでそこまで刺激はないが、喉に入ったとたん、別の何かに変化しやがった。鼻と胃の異物感がすごい。吐き気がとまらない……」



「えっ？ 大丈夫？ 嘔吐しただけでも554L」

「……いや、なんとかこらえたが、この倍の量を飲んでたら間違いなくアウトだった。

口の中が一瞬で掃除してない女子トイレにコープしたような錯覚に陥ったぞ。ひどいニオイだ。

くそっ……だれだこんなもの聖水といいたしたやつは……それとも俺の修行が足りないだけか？」

「だから2、3滴で様子見るべきだったっていったのに……」

「はあ……はあ……くっ……けこいい経験になったよ。

いくら美少女のおしっこを飲み干すのは困難だといっつことがわかった。

だがまあ、飲まないで死ぬ状況なら、何度か吐くの前提に鼻をつまめば流し込めないこともない」

「それはよかったね……」

「よし、気を取り直して、次はうんこオナニーを見せてくれ加藤」

「できればこっちかに集中させて欲しいんだけど……」

「そうさせてあげたいのはやまやまだが、うんこオナニーというのを確かめたいんだ。

うんこをひりだす快感を、オナニーの気持ちよさに加算できるのかとっかが知りたい」

「うん……まあ、そういふこともなやっとならな」



「しかし意外だな加藤。うんこ見せるなんて、

もっと嫌がるかと思ったけど……だんだん調教されてきこないかっ」

「うんこのは嫌がるも余計に恥ずかしくなるかな。

実験みたいもんだと思うてもう割り切るしかないぞ。

それに、洋式なら角度的に、ほんとに出てくるのを見られない」

おしりすのこそんなに変わらなげかなん。」「オナニーは少し心配だな」

「それが。助かるぞ。じゃあおんこを」

「あっ……あっ……
イッた刺激でうんちもでてる……
ぜんぜん踏ん張った感触ないうちに
ニユルニユル出ちゃった……なんか不思議な感じ……」



「おおっ……この密室に充滿する甘ったるい香りは、
まさに加藤の出したところ……」
ようやく俺は加藤のすべてを知れた気がするよ。
ありがとう加藤。なんだろうこの充実感……
RPGゲームガリアルだとしたらレベルがあがったときってこんなかんじか」

「そんな珍しいものじゃないのは……
女の子だって普通に毎ロツとちしてるんだから……
……って女中さんといっのまにおちんちんをいっけなわのっ」

「うっ……マンカスキャンディー舐めて……充滿した加藤のうんこの香りを吸いながら出るっ」

「んっ
んっ」

いろいろと惜しい……

20××年02月24日

串団子 さん

投稿数 : Best50

このレビューは参考になった 2人



ステルスヒロイン恵ちゃんの奇妙でちょっと……どころかかなりエッチな冒険

Blessing software

1,404円 /ポイント3%

18禁 同人ゲーム シュミレーション 音楽あり 体験版

最近たまにみる、主人公の存在が薄くて気づかれない系のゲーム。それがヒロインという観点はなかなか面白いけど、女の子が露出するときのドキドキはやっぱり、バレルかもしれないと緊張感にある気がする。

最初はいいけど、進めるとやるのが単調で飽きるというか、システムがイマイチかと。なんかいろいろと惜しいです。

奇抜なことをやろうとして失敗したかんじだけど、なかなかマニアックなエッチシーンが多く、

抜きゲーとしてならアリ。柏木エリ先生のファンで絵が気に入ったのなら買い？

このレビューは参考になりましたか? はい いいえ [\[報告する \]](#)

その後、安芸倫也率いるサークル「Blessing Software」が
苦勞の末、初めて完成させた同人ゲーム、
「ステルスヒロイン恵ちゃんの奇妙でちょっと……どころかかなりエッチな冒険」は
コミケで90本 タウンロード販売サイトで月110本 委託ショップで月50本
あわせて250本前後というなんとも微妙な売れ行きだったという……

その後、安芸倫也率いるサークル「Blessing software」が
苦勞の末、初めて完成させた同人ゲーム、

「ステルスヒロイン恵ちゃんの奇妙なちよつと……」どころがかなりエッチな冒険」は
コミケで90本、ダウンロード販売サイトで月110本、委託ショップで月50本
あわせて250本前後というなんとも微妙な売れ行きだったという……

「くそっ……なにがいけなかったんだ」

「でも一人なら、オフシーズンのハワイにいけるくらいは
売れたんだから、けっこー頑張ったほうじゃない？」

正直10本くらいしか売れないのかと思ってたよ。世の中広いよね」

「いいや。加藤。お金が目的ではないにせよ、やる以上は、
全員でハワイくらいじゃないとダメだろう。」

やっぱり、もっとコアな作りにしたほうがよかつたんじゃないか？

よし、次回作はドフェチな彼女の育てかたという、育成ゲーム風の……」

「え〜まだやるつもりなの？ 安芸くんも懲りないよねえ」

「当たり前だっ！ 俺たちのエロ同人……もといギャルゲー作りはこれからだっ！」

「はあ〜先が思いやられるなあ……」

いろいろと惜しい……

20××年02月24日

申団子 さん 投稿数: 86



ステルスヒロイン恵ちゃんの奇妙なちよつと……

Blessing software

1,404円 / ポイント3%

18禁 同人ゲーム シミュレーション 音あり

最近たまにみる、主人公の存在が薄くて気づかれない系のゲーム。それがヒロインという設定が、かたがたいけて女の子が露出するときのドキドキはやっぱり、バレルかもしれない緊張感に、気がする。最初はいいけど、進めるとやる事が単調で飽きるというが、システムがイマイチかと、なかなかマニアックなエッチなシーンが、奇抜なことをやろうとして失敗したかんじだけど、なかなかマニアックなら買いたい。柏木エリ先生のファンで絵が気に入ったなら買

別ルート1 シナリオ担当 かすみがおか うたは
霞ヶ丘 詩羽

「ほら、倫理くん。私も脱いだんだし、さっさとチンポ出しなさいよ。
確認しておくけど、私がシナリオ書く条件忘れたわけじゃないわよねえ?」

「詩羽先輩……確かに、俺にできることならなんでもするとはいいましたけど、じゃあ……」

「別に童貞よりせめていっぺんやるわけじゃないし、問題ないでしょ?」
まあ、私にいわせれば童貞失うと、エロ創作に支障が出るだなんて
理論を掲げる輩は、それ守り続けたところで、結局しようもない作品しか作れないでしょう
といせくも思っけとね。プロなら童貞よりも童貞らしい妄想し続けなきゃプロと呼ばれないよ?」

「その発言を聞いて、いっぺん問題ですか?……スライキンのメンバー……」

「いっぺんして倫理くん? バンツ脱いでチンポを足の間に挟むだけ。
そしたら足「キシーン」の臨場感がもっとリアルに書けるようになる。
それだけのことよ。私は仕事がかとり、倫理くんは気持ちいい。
誰も損しないWIN-WINの関係。簡単なことだよ? あなたは何も考えないで、
黙ってそのスポンの上からでもわかる、てっかいチンポにスポスポ挟めばいいのよ、ほら早く」

「確かに先輩の足見るたびに、いつもそういう想像はしていましたけど……。もしエロ同人に
するなら、詩羽先輩って絶対足「キキキ」重要員キャラですよ。足「キキ」本だけで軽く5冊は出ますよ」



「それだけは……本当にダメですってば……あっ……抜けないっ」

「先っほだけ？ 先っほだけだから……ね？ いいですよ。なんなら「レド」に触れるだけでもいいから」

「それ男がいう台詞ですよ……詩羽先輩……ちゃん放してんだぞ（笑）」



「っっ……逃がすもんですか……待ちなさい倫理くん。」

「ほら怖くないわよ。あんよが上手う。あんよが上手。んふう……捕まえた。」

「あ……もうっっ……っっ……あ……ちみっく大陰唇を包んじゃった……」

「あ……あ……っっ……っっ……本能に逆らえないっ」

さわむら・スペンサー・えりり

別ルート2 原画担当 澤村・スペンサー・英梨々

「久しぶりに見るけど、きれいなピンク色だな。中っというか外までピンクだよな。オマンコが全体的にピンク。これが俺の求めていた理想のマンコだよ。毛も薄いし、肌も白くて、二次元に限りなく近い純日本人には真似できない、パーフェクトマンコだ」

「フッフ当然じゃない。誰のオマンコ見せてあげてるんよ、このおのよ。」

「そのへんのヴァギナと一緒にしないでくれる?」

「学校一の美少女、澤村・スパンサー・英梨々様のオマンコ」なんだからね」

「ああ、そうだったな。詩羽先輩と並んでそんな称号のついたおのよ……」

「おのよ、おのよ」



「あの女と一緒にしないでくれる? ったく……それにしても」

「創作のための研究だなんて、エロ同人にありそうなべたべたな展開利用するなんて、ほんと倫れもせーイ手使うわね。……いっつねければいっつでも見せてあげたの……」 (ポニビ) 「

「いんなこと英梨々にしカ頼めないしな。本当に感謝してるよ」

「フッフ……まあ気の済むまで見るというわ。」

「アンタなんかどうせいんな機会でもなきや一生、生の女性器見る機会なんてないだろっしね」

「……そこまでいっしょくないだろう。けど、まあお言葉に甘えて中身も見せさせてあげよう」

「す……好きにすればっ……って倫也……まさか……テープで肛門を固定する奴……」

「ああ、そのほうが見やすいからな。いや、しかしこれほんとすげいな。さすがハーフだけあって、おまんこミルクのコクが違うっていうか、

半分チーズみたいなの固まりが発酵してるのに、
ぜんぜん汚く見えないうつというか、マンカスっていつよりヨーグルトに近い風味なんだ」

「べ……別にあなたのためにとっておいたわけじゃないんだからね」

勘違いしないでよね。た……たまたま、排卵期と重なっただけだからね」

「おははは」



「おははは」



「じゃあこの白いの中に英梨々の出した卵子が混ざってるってことになるのかな」

「はあ……パッカじゃないの」

そんなのは生理と一緒に流れるに決まってるじゃない

あんたもっと女の体のことを勉強しなさいよね

そんなんだからモテないし、しょぼい作品しか作れないのよ」

「男子は保健でそういうこと詳しく習わないから仕方ないだろう」

だからっ……」

「まあいいわ。幼馴染のよしみとして、レクチャーしてあげる。いろいろ排卵期ってのは、生理の前後14日くらいで、卵子が作られる期間のことよ。子宮の中に卵子が留まっている日は排卵日。でもその時間は正確にはわからないから、その前後5日くらいをまとめて排卵期っていうわけ。さっきもわかった？」

「あ、ああ。続けてくれ」

「で、子宮内の卵子の寿命は24時間程度っていわれるけど、実際はその中の活動が活発な4、5時間を目安に、精子を着床させないといけないの。つまり、子供を作るにはその排卵期にあわせて山ほど中出ししないといけないの。だから、仮にこれから三日間くらい、さっさと倫世のチンポをばちまわして、私の子宮内にたっぷりサメーン10回分もドビュドビュ注ぎ込んで、たぶん、けっこうな高確率で妊娠して、10ヵ月後、私に10人の子供がめだくオキヤーってわけよ」



「なるほど……そうしたら英梨々のおっぱいも少しは大きくなったりするのかな？」

「そりゃママになれば私だって人並みには……って……よう……余計なお世話よ……まああんたがそこまで試してみたいっていうなら、1人くらい孕んであげないこともないけど」

「いや、俺たちまだ働いてもないしそれはまずいだろ」

「いくら英梨々の親が金持ちで、英梨々も同人の仕事で大金稼いでるとはいえ」

「そ………そっゆね。卒業してからでも遅くないといえは遅くないけど」

「よしっ。とりあえず英梨々の排卵汁舐めてみてもいいか？ 味見もしとかないと」

「は……排卵汁って……なんかいかがやるのよ。そ……そんなに食べたいなら別にいいよ」

「じゃあいただきます」

「と……んっっ。私の……は……排卵汁」

「クチャクチャ……なんか、すごい粘り気があつて
ガムかんでるみたいだ。もっつとけちゃってんのかなーんたらの想像してたんだけど……」



「へ……へえ。味は？ 美味しかったりするの？」

「なんだよ英梨々。エロ同人描いてるのにそんなことも知らないのか？」

「知るわけないでしょ。あんなの全部想像でやってるんだから、実際に美味しいかどうかなんて……」

「まあ、百聞は一見にしかずだしっ。ほらっ。英梨々も自分の食べてみなよ」

「ほっ……あやうく奥までほじられて病院送りにされることになったわ。

ほら見てみなさいよ。オマンコ血だらけの大惨事じゃない。

ほんとあんたってデリカシーってもんが欠けてるのよっ。

もっと加減してもんがあるでしょーが。ったく……人のロストバージンなんだと思ってるのよ」

「いや……オタ童貞の俺がそんないいムード作れるわけないだろ。

こっちは穴の位置間違えないように突っ込むことで精二杯なんだよっ」

「それにしてもって話をしてんのよ。こっちは努力の問題でしょ。

誰だって最初は童貞なのよ。童貞とオタクをいいわけに、あんたが

現実の女の子を理解するの逃げて諦めて、結果暴走独りよがりだこいつこなのよ。

都合のいいときだけ、オタクの肩書き利用して、一番オタクをバカにしてるのはあんたじゃないっ」



「あーそうですか、こんなときにまで、人の欠点をスカスカ指摘してくれますか。

だったら俺もいわせて貰うけどな。そこまで痛がるだなんて

こっちも想定外なんだよっ！ 普通こっちは場面じゃ女の子がガマンするだろっ。

痛いけど、優しくしてくれば耐えられるよっつかないで、

男をキュンとさせるのも女の役割じゃないのか？

それを動物園のサルみたいにみたいにギャーギャーわめいて、いい近所迷惑だよまったく」

「はあ？ なんですかっ？ そもそもあんたの態度とチンポがでかすぎるのが悪いんだよ」

「英梨々の穴が小さすぎるのが悪いんだよっ！

だいたいお前は昔から、背から胸から、人としての器から何から何まで小さすぎるんだよ」

「そうね、そのほうが私たちらしいかも。……それより、問題はアマンタのチンポよね。挿れようと思っても、あの激痛じゃまともな資料にならないわ。」

「このままじゃ、本当の女の喜びを知らないまま、無駄にあへえとが、おほおとが、んほおおとがという同人を描き続けることになる。見事にワンパターン悪循環の完成じゃない」

「ワンパターンも極めればファンがつくぞというのはいってだな、だんだんならしていけばいいじゃないか。その気になれば子供だごてすっばり出てくる穴だぞ？ いくら俺のがでかなくても、赤ちゃんの前くらい太いわけじゃない」

「それはそうだけど……でも痛いもんは痛いのよ」

「まあそこは、体位変えたり、おもちゃで広げたり、ローション」

「使ったりだな、あとは完全に勃起してない状態でも挿れるんよは挿れるよ」

「いろいろ工夫して一緒に乗り越えよう。その……俺もできるだけ協力するからね」



「ほんとに付き合ってくれるんでしょうね？ 私、倫世のペニス以外で試す気はないんだからね？」


「いいっ？ 柏木エリの将来は、あなたのイチモツにかかっているといつても過言じゃないのよ？」

「あたまにフリスチャーかけないでくれよ。男は繊細だからちよっことしたことで萎えちゃうんだよ」

「フッフッフ。そもそもあなたには役立たずのニヤチンコくらいが最初からお似合いなのよ。この鈍感男」

「……？ なんこ？」

「知らないわよ。バカッ」



期待してくれた人々めんねー
あたしの出番って 別フォルダの
マニャック差分だけなんだよねー
なんだっけほら……
話の都合上ってやつ？
でもそっちは
けっこうすごいことしてるから
気になったら覗いて見てよねー

ひょうどう みちる

別ルート3 音楽担当 氷堂 美智留

ほら、倫。倫の大好物の私の使用済みパンツだよ。
ほらほら〜お見よ。おしり(お尻)吸いまわすん〜
納豆みだいにねばねば〜マンカスびりりり〜
半端なく〜カ〜さ〜い。自分でも軽〜く〜ら〜いの汚れだけで、
倫は(おしり)のが好きなんだよね〜？

汚ければ汚いほど、興奮するた〜し〜め〜
ピチピチの代の女の子の
カラタから出るものなら、おりものが、
ウンチの拭き残しにだって
興味持っちゃったりするんだよね？
テレビでナプキンのCM流れるだけで、
妙に意識しちゃったりするんだよね？

モテなくて実際おまんこ舐めたりできないから、
これがその代用品なんでしょ〜？ そつたよね〜。
考えてみれば、使用済みパンツって、何日分の
女の子のエキスをドリップし続けた
限りなくおまんこに近いアイテムだもんねえ〜。
むしろ、味も匂いも、
本物のおまんこよりよっぽど濃いくらいだし。



ねえねえ〜偷っ。

こんな美少女の汚い脱ぎたてパンツ、普通嗅げたりしないよっ。

私と従兄弟で、偷ってほんとラッキーだよな〜。

泊まりにきたときのお風呂上りの洗濯カゴとか〜、

合宿帰りの鞆の中とか〜、探さずとも思えばオカズには困らないもんねえ。

この年頃の男子って、オナニーのことしか頭にないんだよね？

1日3回くらい精子出さないと気がすまないんだよ？

チンポ脳かわいそうーだよな。

毎日生理前みたいなムラムラ状態なんですよ？

アハハ……一発抜かなきゃ

勉強集中できないとか、人として欠陥品じゃん？

プププ……かわいそ〜。

……って笑っちゃいけないよね。ぶぶっ……コメンコメン。

だから〜特別に、私のベストベストパンティー嗅いだり、舐めたり〜
吸ったり〜かぶったりしながら、おちんぼシロの許可してあげよ。
なんなら〜寝ている間に、おっぱい揉んだり、
おまんこぶっつて見るくらいなら、許してあげな〜もないかなあ〜。
まあ小さい頃何度も見せてるし、今更かなあ？

■あとがき

御買い上げありがとうございます。

しばらく別サークルでオリジナルで活動していましたが、そろそろフェチものやりたい欲が抑えられなくなってきたので、ひさしぶりに出してみました。最近、皆さんサークルのオリジナル作品が多く、二次創作は少ない気がしますが、やっぱり同人の根幹にあるのは、元ネタがある作品へ勝手な妄想をぶつけるところにあると思うので、やって楽しいのは、そっちなように感じます。

というわけで今回は冴えカノの加藤恵ちゃんですね。これだけたくさんアニメが毎年作られる中、キャラが動くのを見ているだけで幸せになれる作品はなかなか珍しいんじゃないでしょうか。個人的には内容も好きですけどね。加藤ちゃん嫌いなオタっているんだろうか。

声も好きで、声優さん目当てに久々ラジオまでチェックしたりです。何はともあれ、しばらく埋もれていた、二次欲を復活させてくれたキャラです。円盤売れ行きもよさげだし、作ってる最中に二期も決まりまして、万々歳でテンションあがったまま完成に至ったしだいあります。

そういうわけで10枚程度で簡単に出すつもりが、とととと妄想が膨らみページが増えてしまいました。ネーム的には、かなりいい感じに仕上がったんじゃないかなと思ってます。まあ内容は相変わらずマンネリかもですが、たまにやるぶんには新鮮なかんじがないでもないですね。

どうしても時間かかるので、次は7、8枚低価格路線でさくっと何か出せればと思います。あとは、二期でロングヘアの加藤ちゃん出たら、また描いてみたいです。

今回もたぶん、そんな売れないとは思いますが、同人歴も6年くらいになるので、最近そろそろ液タブを買ってもいいんじゃないかというモードになってきました。小さいサイズで10万位するので、せめてこの作品のオチと同じくらいは売れてくれたら、そのお金で買うつもりです！

画面に直接描けるようになれば、少しは雑なもの治るかもしれないですね。ただ、スピードは上がっても画力が上がるわけではないので、クオリティは変わらないとは思いますが……。

ではではまたお目にかかれれば～。

2015 5月末 みちのく一人旅



※ 本作品は成人向けのフィクションです。
実際の人物、団体、事件などにはいっさい関係ないのであります。
18歳以上の閲覧はらめなのれず。ネットなどへの無断UP行為を禁じます。

ビ
ッ
子

ドフェチな彼女の 育てかた

マニア向けおまけ編

あ……でも
あんまりお母様だから
過度な期待もしないでね

えっと……ここから先は
特に汚いシーンが多いから
見ないほうがいいと強ひたす
私は止めたからね？



「というわけで加藤。ここからはさらにマニアックな性的嗜好を持つ方のための差分作りの研究をしていきたい。

それに話の展開上、本編にいれたくてもいれなかったケースなんかも出てくるしな。いわゆるおまけディスクの収録みたいなものだと思うてくれ。あるいは映画でいうNG集みたいな」

「うーん。本編でも十分マニアックすぎて眩暈がするほどだったけど、世の中にはそれじゃ納まらない人もいるんだねえ」

チキ

んん

チキ

チキ

チキ

「その通りだ。これからやろうとしてることでって、その入り口程度のフェチズムに過ぎないんだ。もっと闇が深い性癖の方々の期待には残念だが、うちのサークルでは扱うのは無理だ」

「ふーん。そっかー。とりあえず、CGが使いまわしなのは許してまよんまげってか感じなんだね」

「そこには触れてくれるな加藤……なにぶん時間がだな……」

「えへへ……。で、私は何をすればいいのかな？」

「まあはっぴーだ加藤ー」

「ええっ！ そんな恥ずかしいことできないよ安芸くん……って驚きたいところなんだけど、たぶんそうなんじゃないかとは思ってたんだよね。だってすでにベッドと床に新聞紙してあるし。一応聞けば、うんちは前もやったよねっ」

「ああ、でもあれは、洋式便所で、とちうかというと排泄シーンが主役だ。

本物のスカマニアの期待に応えるためには、うんこが主役じゃないといけない。そういう絵が欲しいんだよ」

「なるほどお……確かにこの体勢なら出るころ丸見えですごくいい画面になりそうですよね」

「うんこが主役じゃあないか、加藤」

「うん……うん。ちようどタニシツクやん出そうだしね」



「おいおい……加藤。そんな都合やん出るとは、本物のうんこじゃない。」

それじゃ台本みたいじゃないか。それに、もううんこばんで恥ずかしがってくれなう……」

「……もう、細かいなあ安芸くんは。本当に恥ずかしがる子は人前でうんちなんか絶対見せるわけないし、それだと余計に演技感出て、うそ臭くなるんじゃない？」

「んんん……確かにそれも一理あるな……」

「二次元の女の子はうんちするのも自由自在でいいからサクサク進めようよ。

お約束も大事だよ。私だって安芸くんの頼みだから、

仕方なしにうんちするわけであって、誰にだって協力するわけじゃないよ。」

「へっ……やむをえない。さすが加藤、こんな都合のいいタニシツクやんかどうもどう助かるなあ」

「ハイハイ。じゃあめするよー」

「んっ……うんっ……ふうっ……ぶすっーっ」

「どうした加藤？ おならばっかりでせんせん出せうにないじゃないか？
土臭いっ！ぼつみだいな匂いでむせ返りそつだ……すく出るんじやなかつたのかっ？」

「んーっ……人に見られると……やっばりねえ……」

「そうすんなりはいかないというか……浣腸とか使うのはなしなんだっけ？」

「アス！」

「モクモク」

「俺は邪道だと思ってる。浣腸は浣腸という別のジャンルで、
ゆるゆるの水使っばいのしか出ない気がするし、ありのままの自然便に勝るものはないだろっ」

「だよーね！。おかしいなあ……緊張でひっこんじゃったのかな」

「今更俺に見られるくらいどうってことないだろう……」

「このゲームが完成すれば加藤のうんこシーンで、何十倍もの人間がオナニーするんだぞ」

「仮にすることも別のシーンだと思っばい……」

「たとえ一人しかオカスにしないようなシーンでも全力で作るってこそが、ファンの獲得には必要なんだよっ！」

「全力っていつでも絵が使いまわしじゃ……」

「……そっちは触れるなといったらう。あくまで精神……スピリッツの話をしているんだ」

「わかったから……ちよつと集中させよう。シッコミを吐いて、お尻に力が入らないっば……」

「ああ、すまない。じゃあ、黙ってみるわ」

「あつ……また来た……波が……だいたいけそう……フリュウウウウウ フリュウ フォンッ フンッ」

「おいおいッ加藤……さすがに出しすぎだろう。遠慮というものはないのか？ 一応俺の部屋だぞ」

「だって量なんて実際してみるまでわからないし、コントロールできないんだもん。」

「それに女の子は便秘になりやすい分、する時は一気に出すのが多いんだよ。」

「男の人より腸が長くて、それだけ貯めておけるんだけど、長く熟成される分匂いもきつくなる……」



「ほーそうなのか。加藤って……なにげに人体に詳しいよな。普通の女子は知らないぞとかな」

「えー。そうかなあ。けっこう常識だと思うんだけど」

「俺の知識が二次元に傾いてるだけなのかな」

「そうかもね……ふうー」

「おっ……もう全部出たか？」

「んっ……たぶん、あと小さいのが少し……かなっ」

「あゝあ。肛門にぶら下がったまま、ノロノロが糸ひらいてるじゃないか」

「あゝ。やっばい、これってストップかなあ。もう田舎じゃあな。おんおんおん」

「おっ……おひつ……あーアナルセックスもいいもんだねえ安芸くん」

「しんなかんだろ？ 加藤」

「うん……なんか……子宮を裏から圧迫されて……」

勝手に声が漏れちゃうかんじ……オマンコのときは……

けつこう意識してあえぎ声出してる感もあって、

ガマンしようと思えばできなくもないけど……

おっ……おおおっ……ほお……これはちよつと無理だなあ」

「痛くなごのなっ」

「んっ……さすがにちよつときついけどね。たぶん数日間はヒリヒリしたままじゃないかな。

でもそのマイナス面あっても、ぜんぜんプラスになるくらいソクソクするようなかんじだよ。

もつと慣れたらちよつときになつて、前と後ろ、どっちか一本じゃ物足りなくなりそつで怖いんぢ……」



「確かに……このキキキキは、一度味わったら「リ」になりそうだ……」

「あぁっ……おまんこだけ行き止まりあるけど、
アナルごとお腹かき回されるんじ……」

「とこまでも奥に入ってるようなかんじがするよ。
んっ……ふう……でも一番気持ちいいのは

チンチン抜くときだったりして……安芸くん
お願い……何度も肛門挿れたりっ……出したっ……っ」



「んん……お……んんか……んんか……んんか……」

「は……んん……んん……オチンポいいっ。」

「し気持ちいいよ、安芸くんっ。」

「ケツマン」をむすがゆいゆいっ。ずっずっちちち編みし続けたい……っ」

「あゝ。ごめんね。今ひりだすから待つてね。」

「んしよっ……はあゝなんか変な気分だよ。きつと安芸のおちんちんの太さと私の最大サイズのうんちの大きさと同じくらいだよな。さっきと感覚がそっくりだよ」

「はあはあ……抜けたっ。あーくそっ……部屋がめっちゃめっちゃだ……窓開けないと」

「あつ……ああつん……安芸くん……」

「おかげで残りも……出し切ったよ……なんだか出産し終えた気分だよ」

「これだけ出して、明日にはまたうんこ」

「貯まってるんだから、しよせん人間はうんこ製造機だよな」

「そっだね……。変にかつこつけてないぞ」

「お互い恥ずかしい部分全部さらけ出して」

「本能のまま気持ちよくなつたもの勝ちかもしれないね」

「まさかうんこにそれを教えられるとはな。本当に大切なものは何かってやつを……」

「あつただけに……んたいせりのオチがついたとさあ、ん。じゃんじゃんだね」



「おんな加藤。マリマルの差が第一段じゃ」

「ロートンズクンには、おんな加藤のその計画をばいおんな加藤」

「それって私に拒否権はないんだよね……」

「いや、そこは加藤の裁量しただよ。もう無理ってなったら」

「リダイヤしてもうってかまわない。ただ人前でうんこできるようになった今の加藤なら、これくらいは楽なミッションのうちに入ると思うが？ とっただよ」



「さあ、三回くらいならおんな加藤もならば」

それ以上はごうかなくてかんじだよな。

匂いはパンツ重ね履きでごまかせるとしても、だんだんかゆみが増えてきそうだし」

「ちなみに今までの最高回数？」

「基本毎日替えるけど、友達とお泊りのごまか、お風呂借りない場合は、そのまま履いていたらするから、一回くらいが最高なんじゃないかな。」

「おんな加藤は毎日一回か二回か三回か」

「えっと100時間だよ……4日くらいだよ……うん……とりあえず頑張ってみよう」

「仕上がりはいいんだ加藤っ」

「んー。どうだようねえ。でも思ったよりも余裕だったかなあ」

「ほう……では成果のほくを見せてもらおうか」



「おっ、おっ」

「あ、あ、あ」

「ドキ」

「ドキ」

「ドキ」

「ドキ」

「うん……まあ……こんな感じかなあ……汚れた部分が」

乾燥してきちゃって、カピカピに固まっちゃうから思ったほど汚れないんだよね」

「おおっ……これが加藤の100時間分の尿ジミと」

おりものチーズとマン汁ミックスの描き出す地図模様か……とれ匂いは……」

「とっ？ あれっ……確かに想像より」

「だいぶおとなしいというか、閉じ込められたまま動かないというか」

「うん。なんかヌルヌルが固まる前のほうがすくて、

トイレでパンツ脱ぐたびにエッチな匂いプンプンしてただけで、

ピーク過ぎちゃって、もう匂いもそんな漏れないかんじなんだよね」

「うっ……なんてことだ……染み込ませば染み込ませるほど、

濃厚で芳醇なパンティーに熟成されるよ

ばかり思っていたのに……欲をかきすぎたばかりに……裏目に」



「おっ、おっ、おっ」

ドキ

おま、

ドキ

フッ……

「まあこれがリアルなんだから仕方ないよね。このまま一週間履いても
パリパリに乾燥したおまんこカスが広がるだけだと思っよ。
っていうか白い粉になって元がなんだかわからないような
かんじになるんじゃないかな？ やっぱりこっこのうのは鮮度との兼ね合いが必要なんだよ」

「わかった。じゃあ加藤に任せるよ。次は一番いい状態でもってきこくれ」

「うん。思ったんだけど、おしっこ拭かない回数増やすと、

ムレとか適度な湿気とかでいいかんじになると思っただよね。それでやっこめこいかな」

「ああ、頼む……へそ……は……び……び……預けか……」

68時間後……

「安芸くんごっかかな？　今回はかなり自信作なんだけど」

「おおっ……すごいぞ加藤。まさにこれだよ、俺ガシミアンに求めていたものは。」

この卵の黄身がぶるんと溶けて染み出した様な色合いと、
布をすりつぶすとじゅわっと蜜が溢れる湿り加減が絶妙だ。

アンモニア臭も新旧のニオイがブレンドされたまま、

独自の芳醇さを醸し出していて、鼻を当てる場所によって

違った甘酸っぱさが楽しめる。表面にマンカスの薄い膜が張られた

一番濃い場所のフェロモンは、目に染みるくらいこの濃度で嗅ぐだけならシムシムかき入った」

「ちよっご油断してて、うちのめともついちゃったけど……」



ドキ
ドキ
ドキ

モッ

「ウンカスっ……いやっ……これは思わぬ収穫でいいぞっ。」

クロッチも、後ろも別の香りが楽しめて2度、3度美味しいじゃないか」

「ウンスジって乾くと、案外甘ったるくて

いいニオイするよね。固まりそのものだと想像もしたくないけど」

「確かに、濃厚な小便臭で麻痺した鼻の箸休めにはちよっごっ」

「それにしても、すごい表現力だね安芸くん。グルメマンガの審査員みたい」

「よし……肝心の味だ……」**「クゥ」**

「はいはい。それにしても保証できないけど、
「一応がいが薬用意して来たから、すいお口の中消毒してるわ」

「はああ……これはすごい。不覚ながら、舐めた瞬間に射精してしまった。
まさに女……メスの味だ。女の股から出るすべてのエキスを、
丁寧に丁寧に抽出して仕上げ、苦味、甘さ、酸味、これもバランスよく
混ぜ合わせた上、口の中ですりすり溶け出す極上のソースに仕上がっている。
ぴりとした舌の刺激も、脳に瞬間で発情せよと命令を送るサインの
役割を果たして、太古から刻まれた本能的な情欲をそそる。一言で言えば……」

「……」



「……」

「チンポにガツンとくる味だっ！」

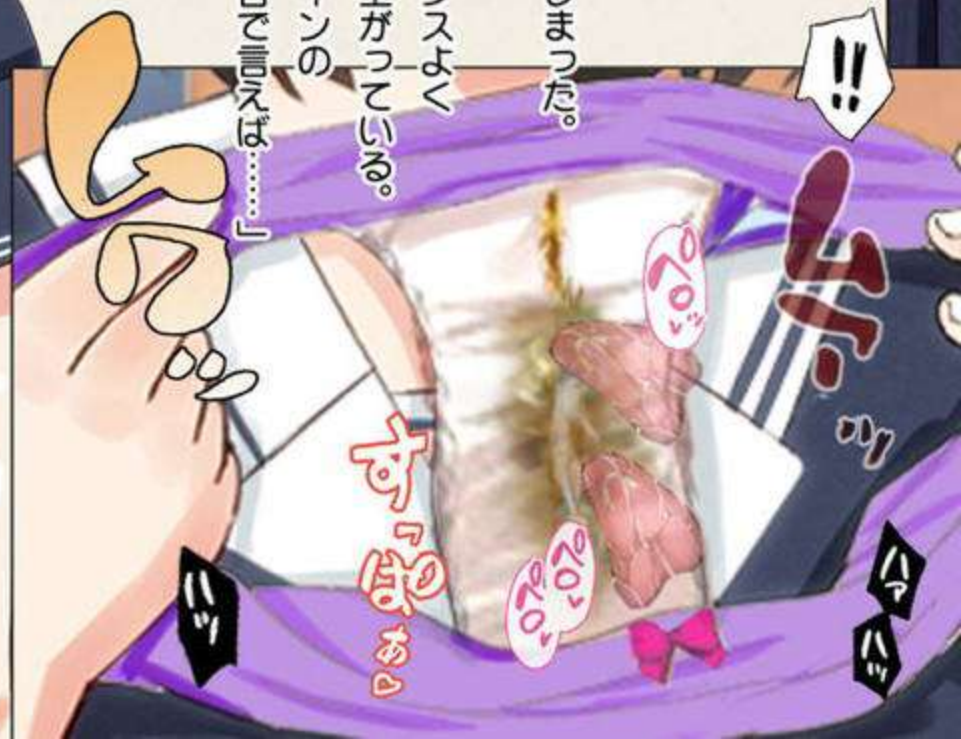
「そりか……ちよつと悔しいなあ」

「えっ？ どうしてだ？ こんなに褒めてるのに」

「実はこれ、私のパンツじゃないんだよね。新しいの作ろうと思ったら、生理になっちゃって、
ちよつとお泊り会をしていた、美智留ちゃんの借りてこつそりもってきちゃったんだよね。」

「美智留ちゃん、最近新陳代謝がすくなくて、1日半で、自然にこんなにパンツ汚しちゃうんだって。
やっぱり従兄弟同士で安芸くんと血がながってる分、近いニオイでマッチするんじゃないかな」

「な……なんだってっ？」



「あいつ汗っかきだしなあ……」
なんだこの妄想は……じゃあ俺は美智留の下着で射精したのか」

「まあ、それもアリじゃない？ 従兄弟同士は結婚も出来るんだし」

「そういう問題じゃないだろう。次からこんな顔であいつと会えばいいんだっ」

「まあ、私も、他の人の下着のシミがどんなのが興味あったし、

たまには「ういっういっうのもいいかと思って。ほら、私のはいつでも嗅げるんだし」

「そんなに興味あるなら加藤も舐めてみたらどうだっ？」

「う……うん。実はそういうられるんじゃないかと思ってす……」
「う……うん。実はそういうられるんじゃないかと思ってす……」
「う……うん。実はそういうられるんじゃないかと思ってす……」



「つたく……加藤もいよいよ変態じみてきたじゃないか。」

俺でも、他の男のザーメン舐めたいなんて発想はゼロだぞっ」

「でも、ふたなりっというんだっけ……女の子におちんちん生えたら、
ちよつとフェラしてみたいなとか、そういう興味あるでしょ？」

男子って一度は自分のチンチン啜えみようとするらしいし。体柔らかい人は届くんだよねっ」

「まあ、なくはないが……男の娘とっしジャンルもあつな」



「その点女子は自分の股間には絶対ベロ届かないんだから、舐めるとしたら
どうしても他人のアソコになっちゃうよね。美智留ちゃんも背高くて、
男子みたいなおところあるし、イケメンバンドマンの男装というか、そういう感覚なんだよね。
だからあんまり抵抗ないというか、それでなくても女の子同士って平気でおっぱい触りあったらさあなっ」

「わかったわかった。じゃあ挑戦してみよう」

「んっ……うんっ……やってみる……まずはニオイから」

「どうだ？ 加藤」

「うん……安芸くんのこととおりでよ。これが凝縮された思春期のメスのニオイなんだね。一瞬で頭飛びそう……あ……ためっ……くらっとしてきた。……ハアハア……これ飛ぶねえ……私女の子のなのに、このニオイが異性誘ってるの本能的によくわかるもん……。これって子供孕ますのに一番いい時期だよって、美智留ちゃんが周りに教えてる匂いだよ。健康な赤ちゃん産むなら、今が適齢期だよって合図。だから男の子が嗅いだら頭おかしくなっちゃうの、ある意味正常だと思うよ。あ……なんかいけない世界へトリスミソ……」



「だっっっ、誰にでもできる」

仕上がり具合じゃないんだよそれは。

なんか悔しいけど、美智留のシミパン

生成技術と音楽の才能だけは認めざるをえないな」

「ただパンツ汚すのにも、体質的な才能があるよね。」

「私じゃこの頑張っても」ここまでではならない気がする……」



「じゃあ……そろそろ味を……」

「おっ……いよいよ加藤が未知の領域へ……うっうっ百合ももありといえばありが……」

「ペロ……っ……ッロ……おっっ……おびっ……う……」

「わあ……加藤。大丈夫か？ ちょっと胃液吐いてるぞ」



「おっ……おびっ……うん。おへんげだね。今までのロシアンサンドよりな、

あまりに強烈な味なんで、

酸っぱいのが勝手に逆流してきちゃった。

ふっふっ……でも本格的なゲロじゃなくってかかったぞ」

「その発音自体、シロインマンはアホな奴かも知れない……」



「ゲブツ……気にしない気にしない。」

「はあく。でも自分のだとイマイチわからないけど、」

「人のオマンコの匂いだとはつきりわかるよ。これは夢中になってもおかしくないよね。」

「私は吐いちゃったけど、味ももっと興奮してるよきなら、興奮高めてくれそっすだ。」

「そっかあ……私いつも、こんなに発情したいやらしい、匂いと味を、安芸くんは味わってもういっそ食べてね。」

「もう缶コープ一杯くらいなの、加藤のマンコ汁飲んでるかもな。」

「そんなに飲んでるのに違いがわからないなんて、安芸くんは味覚もほんの少し敏感だよな。」

「私は安芸くんが出したサーメンなら、目を瞑っても当てられる自信があるけどな……。」



「はいはい。悪かったよ。で、頼みがあるんだが、
今度は出海ちゃんのパンティーをせびこも……。」

「だめっ。っていうかまだそっまで仲良くないし。」

「Nicoちびー」

「また頑張って汚してあげるから、」

「当分私のでガマンだよ。安芸くん。」

「あー」





はあ……はあ……ごめんなさい倫理くん……

あまりに興奮しちゃって、はしたないケツアクメ姿も見せてしまったわ。

まあ、私の場合、別の言葉でいいかえるとピチ糞お漏らしということになるのだけれど、ストッキング越しで直接ブツを見られてない分、まだマシよね？

え？ ちょっと漏れてる？ やだっ……量多くて突き破っちゃったのかしら？

んっ……実は私、よく仕事で行き詰って、ストレス貯まうたときとか、

どうしてもアイデアが湧かないときなんか、

もう履かないストッキングやパンツなしに

……うっぶっにお漏らししてしまう癖があるの。たまに、外で野クツもたまあるよ。

この淑女……いえ、人として最低な行為をしている背徳感を、そのまま快楽に変換するのが最高のよね。幼児退行的な、リラククス方法とでもいうか、そうすると頭の中がスッキリして、切り替えられるのよ。

この肌に汚物がモリモリひっつく感触も悪くないわよ倫理くん。

あー取り返しがつかないことをしてしまったっていつかドキドキがたまらなく

おまんこ、おっぱいを締め付けて、電気が背筋でソクソクって走るの。

あーまだ出る。ほら見て、倫理くん。

私が汚いピチピチうんこ垂れ流しながら、理性捨てて快楽に墮ちてみるのよ……



ういっ

アイタタタ……コメン論つ。
あたし、今、肛門の調子も悪くてさあ、
痔じゃないとは思っただけど、
なんか切れちゃってて犬する時超イタいんだよね。
お腹のほうもそれ察してかとうかしらないけど、
うんざりさんみみたいなコロコロうんちだし、
逆に何回も分けられると余計痛いっーの。
こっちとしてはさー、一気にスポスポ出て欲しいわけよ。

あー痛つ。はあーもう、ありえないよねー。
まんこはコシたまりやすいわ、

お尻は切れてるわで、完全女の子失格じゃん。

……いや、ガッカリするのはわかるんだけどさあー、
でもこれって、認めたくないけど

多分三次元の女の現実なんだよねー。

いつも調子いい子なんてめったにいないし、
だいたいどっか調子悪いよ女の子って。

生理で肌荒れてたり、鼻毛出てたりいー、

お腹壊してたり、お尻にできものあったりするんだよねー。

ムンムン

ゴキゴキゴキ

おしり

ズキ

お尻

ズキ

お尻

カー

お尻

ムンムン

ムンムン

ただで、そういう汚い部分ならさく見せない方がいいし、
「まがじい」男の前ではかわいさ取り繕ったりするめいちゃん。
それって全部男のためじゃん。
だから論せー、お尻にできものって思っついで、
女の子にはさくさくしていいお尻はないとダメだよ。